もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M·O·H通信

M·O·H communication

特集：未来創成「私たちが変える」

37号
2012
Autumn

Vol.37
2012 Autumn

書「命」
一畳程の大きな書。齊藤さん渾身の作。

江湖庵　Kōko（こうこ）
印章彫刻師（一級技能士）**齊藤 江湖さん**

「はんこと書」それは唯一つのもの

着流し姿で出迎えてくれた江湖さんは、中学生と小学生の二児のパパ。三代続く判子屋さん。大阪で師事した後、第20回全国手彫技能グランプリ金賞を受賞した。「お客さんと近い距離で判子を作りたい」と路上パフォーマーのように判子を彫ったことも。「おじいちゃん、父そして私」の三代続く表現センスが、光る。彼の手から生み出されるデザインは幸せを願い健康を願うあなたの人生の縮図が表現されている。

ほっこり文字で書く彫る、楽しいお店
マイはんこを持ってみない?

［shop　江湖庵（尾賀商店内）］
〒523-0848
滋賀県近江八幡市永原町中12
tel&fax0748−32−5567
http://oga-showten.com
http://amebio.jp/hanko-de-dessin001/
http://www.koukoan.com
木·金定休（日·水曜日駐在）

［サイトウ明印館　本店］
〒527-0022
滋賀県東近江市八日市上之町6−17
tel&Fax0748−22−2217
毎日曜·第1·3土曜定休

「M·O·H」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★ M·O·H通信の役割 ★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M →もったいない　**循環**　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O →　おかげさま　**共生**　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H →　ほどほどに　**抑制**　欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

contents
目次

特集「未来創成」— 私たちが変える

M・O・H巻頭言
地産地消は古くて新しい経済の大原則　森　建司 …… 3

M・O・Hな店　大学生の挑戦
レトロカフェで商店街を元気に　…… 5

① M・O・H対談
地域の歴史風土と“美”の融合
芸術大学の新たな取り組み　近藤 功 & 森　建司 …… 9

② M・O・H座談会
滋賀の新たなものづくりと持続可能な地域モデル
嘉田 由紀子 & 辻 信一 & 上田 洋平 & 森　建司 …… 17

③ M・O・H通信からの提案　「ものつくり産業」から「ものがたりつくり産業」の創出へ
おしゃれな滋賀・地産M・O・H市場の創設案　…… 26

④ 寄稿
東近江市の挑戦　山口 美知子 …… 29

⑤ 寄稿　淡路島からのメッセージ
「農」の可能性と「地域創成」　木田　薫 …… 35

インターナショナルメッセージー独逸
自動車王国で自動車に乗らない生活　原 修子 …… 42

⑥ 寄稿　話し合いをベースにした縁側づくり
鈴鹿カルチャーステーションとアズワンコミュニティ　片山 弘子 …… 43

⑦ 寄稿　山・川・里・湖のつながり再生に向けて
琵琶湖を守る市民活動のデパート、野洲　佐藤 祐一 …… 48

⑧ 寄稿
親子をつなぐ学びのスペース リレイト　中桐 万里子 …… 53

寄稿
「ビワイチ」　豊田 一美 …… 57

愛する風景
お山の大将さん　畑　裕子 …… 59

漫画
山暮らし子育て日記　オノ ミユキ …… 61

里のお話
萩遊び　三山 元暎 …… 63

♪第6回 MOHせんりゅうコンテスト 2012♪ …… 64
本の紹介 …… 65
講演日記 …… 67
M・O・Hニュース …… 67
イベント紹介 …… 68
通信概要 …… 69
読者の声 …… 70

表紙イラスト
表紙の花は、花言葉が「希望」であるガーベラをイメージして描きました。

●郷内ユウコ＝滋賀生まれ滋賀育ち。滋賀県立大学でデザインを学び会社勤めとなる。

未来創成 —「私たちが変える」

茅葺き民家を自力で再生したマキノ在原の福井邸（風と土の交藝にて）

地産地消は古くて新しい経済の大原則

森　建司

私はグローバル化に反対論である。常に世界中でもっとも廉価な商品を求めて、それを国内産と競争させ輸入することが、わが国にとって（国民にとって）よいことだろうか。商品が生産されるためには、原料段階から、部品の製造、完成品化、流通と幾つかの工程があるが、不可避の事情はあるにしても、少なくとも食品、衣類、住居等、生活必需品は昔から言われているように、最寄品である。決して買回り品ではない。

最寄品ということは今の言葉でいえば「地産地消」ということだ。生活をする以上無くてはならない、無くては生きていけないモノが生活必需品なのだから、それを輸入に頼ってはいけない。国際紛争や、自然災害の様なことで輸入が滞ったとき、どうすれば良いのか。少なくとも行政も生産者も消費者も、挙げて「地産地消」を守り育てていく努力が必要なのだ。

消費者は価格が安いからといって外国産に飛びついてはいけない。家族が繊維関係に携わっているにも拘らず、消費する衣類は安い中国産を買っているということはないだろうか。家族の就労の機会を妨げないためにも、消費者はわが国の産業を空洞化させる原因をつくってはいけない。その生命線は自分が握っていることを、消費者は常に自覚して行動すべきなのだ。

大企業はグローバルに生きる以外に生き残りの道は無いのかもしれないが、地元の中小企業まで海外に移転しなければならないような経済環境にしてしまうことは、取り返しのつかない重大なミステイクである。

特に問題は農産物である。農業は自然の中でしか生産出来ないから、地形、気象、土壌、水利等自然環境によって、生産品に価格、品質ともに大きな差がでることは避けられない。

わが国の農産物は大型機械による大量生産には不向きで、コスト的には不利である。しかし、自然環境や人的努力によって品質の良さにおいては、諸外国のレベルを超えていることは間違いない。

現代は経済思考から発する価値観によって、遠隔地からの輸送に関わるエネルギー等を無視しても、店頭の価格のみを対象にして動いているようである。

供給者（造り手）の顔が見えて、消費者と一体になった経済が生まれて、地域の繁栄が約束される。消費者は生産者が製造に心をこめた思いを大切にし、満足すればご近所に口コミで宣伝活動に一役かって出る。双方が感謝しつつ商いが出来てこそ、長い取引が続くのだ。

M·O·H な店
東近江編

レトロカフェで商店街を元気に
大学生の挑戦

暑い日差しが降り注ぐ中、縁日を楽しむ子どもたちの元気な声が聞こえてきた。ヨーヨーつりや駄菓子販売の様子をみていると、どこか懐かしい気持ちになる。

古民家が息を吹き返すトキ

能登川駅から徒歩1分。駅前商店街の『子民家etokoro』に、滋賀県立大学の近江楽座チーム『能魅会』が運営する『ラリルレトロカフェ』がある。駅が近い立地にありながら、飲食店が少ないなどの問題を抱える能登川商店街を元気づけたいという思いがあった。

『絽絽の家』と名付けられた古民家は、麻織物の商家でもあった。住人をなくした『絽絽の家』と隣の古民家は、寂しく朽ちていくのを待っていた。2011年、地元の人たちと学生の手でレトロをモチーフに、昭和を感じることができるコミュニティスペースとして生き返った。

カフェは月に2日間だけオープンし、同時に毎回違ったイベントが企画されている。8月は庭先で縁日が開催されていた。

なつかしい&あたらしい&おいしい

レコードから流れる曲はユーミンやビートルズ。多くのお客さんで賑わいながらも、ゆっくり時間が流れるように感じられる。黒電話や昔懐かしいおもちゃ、井戸水クーラーなどのレトログッズがそろう店内は、まるで昭和にタイムスリップしたよう。これらの展示品は、地元の方々から寄付していただいたものだ。

そんなカフェでいただいたのは、プレートランチの特製れいめん（デザート付き）、ふなやき、プリンアラモード。おすすめメニューのふなやきは黒糖やキャラメル、あんこの味を選ぶことができ、昔ながらの味をお腹いっぱい満喫することができた。

学生が本気になる

「能登川商店街にはレトロなものが多いので、このレトロさを活かして皆さんに楽しんでいただきたいです」と能魅会2代目代表の岡村友香さん。

発足時から活動に携わってきた岡村さんは、代表となってから、今まで以上に忙しい日々を過ごしている。

「発足当時はアイディアがたくさんあって、そのことだけ考えてこられたのでとても楽しかったです。代表になってからは、楽しさの中にも全体を見渡して仕切っていく難しさを感じました。月に2日だけの運営であっても、毎回新しいイベントを企画するので準備に苦労しますが、やりがいや達成感を感じています」

店の内装、広報、イベント企画、メニュー開発まで、地元の人たちとも協力しながらたくさんの仕事をこなしている。学生だけでなく、地元の人も巻き込んでいくことが重要と考える岡村さんは、挨拶回りなどの商店街の人たちとのコミュニケーションも大切にしているそうだ。

子どもにたくさん来てもらいたいという思いから子どもチラシを作成したり、人気メニューを店内の壁に写真付きで表示したりするなど、常に新しい試みを続けている。

「たくさんの人に来てほしい」と岡村さん

❶ 立派な門構えのカフェ外観　❷ 親子で縁日満喫中　❸「かき氷いかがですか〜」

地域と学生の架橋に

「私たちの目的は売り上げではありません。地域の人たちにとって居心地の良い空間となり、能登川地域だけでなく広い範囲の人たちにこのカフェのことを知ってもらい、多くの人で賑わう元気な商店街になれば嬉しいです」

後輩たちにずっとこのカフェを続けていってほしいと岡村さんは考えている。来客数や常連さんも増え、ラリルレトロカフェの存在は多くの人に知れ渡るようになってきた。商店街を元気にしたいと願う学生たちの挑戦は続いていく。

そして、たのしい

初めての駄菓子屋さんに目を輝かせる子供たち、レトログッズやレコードを聴きながら昔を懐かしんでいる大人たちが集まる空間に、また来たいと思った。

カフェの生み出す可能性

このラリルレトロカフェの成り立ちをみると、若者と地域が一体となって、場と空間を創ることの重要性が埋め込まれ

❹ 懐かしいレトログッズがたっくさん ❺ ヨーヨーのプールで「きもちい～たのし～」 ❻ 浴衣の接客、素晴らしかったです! ❼ 8月のランチプレート「特製れいめん」700円 ❽ ふなやき(左から黒糖、キャラメル、あんこ)200円 ❾ 人気メニューのプリンアラモード300円 ❿ 店内ではアロママッサージもやってます。500円

ていることに気づく。

子どもたちが集う場には大人が介在し、大人が憩う場には不思議なつながりが生み出される。サービスに奔走する若者のかいがいしい姿を見るにつけ、「彼らが住みたい場所にしないと」と発奮する大人が増えてきそうだ。

カフェの生み出す可能性をたくさんもったラリルレトロカフェに期待したい。

【近江楽座とは―】

大学の総合力、教員の専門性、学生の行動力を源に、地域活性化への貢献をとおして、地域社会へ根付いていくプロジェクトを募集し、所定の審査を経て採択されたプロジェクトに対して、調査、研究、活動等経費を助成するもの。(「近江楽座」HPより)

●ラリルレトロカフェ
〒521-1224 滋賀県東近江市林町2-1
今後の営業日時
●9月22日、23日 ●10月27日、28日
ラリルレトロブログ
http://retoronotogawa.blogspot.jp/

●対談

近藤 功
成安造形大学 学園理事長

森 建司
循環型社会システム研究所 代表

〈 未来創成「私たちが変える」〉

地域の歴史風土と“美”の融合 芸術大学の新たな取り組み

大津市仰木のキャンパスからのびやかな琵琶湖の風景を眼下に望む成安造形大学は、滋賀県内で唯一の芸術大学です。地域に根ざした芸術大学として近江学研究所や地域連携推進センターを学内に設立するなど、地域と連携したさまざまな独自の取り組みを行い、創立90周年を迎えた一昨年には【キャンパスが美術館】を整備して新たな一歩を踏みだしました。学園理事長の近藤功さんに成安造形大学が掲げる「芸術による社会への貢献」の理念、そして教育についてお話をうかがいました。

■成安造形大学（大津市）
■2012年7月3日

地域に根ざした芸術大学のあり方

森　地産地消という言葉も最近ではよく使われるようになりましたが、食料品だけでなく、中小企業など地域に根ざした産業や手づくりのものをその地域の人たちが買って暮らす。そういう形での「地域産業おこし」の運動を弊誌を通してやりたいと考えています。再生するのではなくて新しく創るんだという意味をこめて、それを「未来創生」と呼ぶ方もいらっしゃいます。

そうした意味で、大津の仰木に成安造形大学ができたことは地域のイメージを大きく変えたと思いますね。

近藤　本学は、自然環境や文化資源など恵まれた環境のキャンパスで、また、学生も近畿圏のみならず全国から集まっています。一方で本学は、滋賀県で唯一の芸術大学ですから、これからこの土地にどれだけ根をはって地域に評価してもらえるか、卒業生が留学生も含めて、それぞれの地域にどのように役立っていくのかが大きな課題だと考えています。

森　私ども企業の方ではデザインや販売促進の仕事もやっています。ところが、デザイン系の仕事は東京に集中して、地方の仕事が東京の大企業にどんどん吸い取られていってしまう現状です。今後も地方で事業を続けていくためには、デザインのレベルを上げていかなければいけないと思います。

また、今までの商品は価格とモノとしての機能ばかりが重視され、「これにほれた！」というような商品に対する心が無視されてきたように感じています。そういう点でも、卒業後は芸術大学で学んだことを地域社会で発揮していただきたいですね。

近藤　本学では授業でも県のポスターやびわ湖ホールのＰＲをずいぶんやっています。地元の企業、市民団体、公共施設などからの要請を授業にとりいれるなど、地域との連携には特に力を入れています。

芸術による社会貢献

森　成安造形大学では「芸術による社会への貢献」を教育の基本理念として掲げ、学内に「近江学研究所」や「地域連携推進センター」を設けておられますよね。

近藤　琵琶湖の畔に根を下ろした滋賀県唯一の芸術大学としての意義を広く知っていただきたい。その一環として「近江学研究所」が設立されました。

森　近江学というのは？

近藤　成安造形大学は近江という地域に固有の風土を改めて深く学問として研究する「近江学」と名づけました。美しい自然環境と豊かな文化資源に恵まれた滋賀県を多角的に研究し、芸術大学でのものづくりや美と融合させることを目指して学内に「近江学研究所」を置き、近江を探求する学生のフィールドワークをはじめ、社会人を対象にした公開講座も積極的に開いています。

森　地域文化の研究と芸術の融合というと、具体的にはどういうことをされているのですか？

近藤　地域と連携していろいろやっていますが、最近の動きで特におもしろいのは地元・仰木の過去の生活や歴史・伝承を学生が聞き取り調査し取り組んでいる

❶【キャンパスが美術館】での展覧会。岡田修二×高梨純次「水辺ー寂静」（2011年10月23日～11月6日）仏像「木造十一面観音立像」（三井寺蔵）撮影：高橋耕平　❷仰木の棚田をフィールドワークする学生たち。棚田の水の流れを調査しました。

「ふるさとカルタ」がその一例ですね。これは近江学研究所と学生による3年連続した研究の成果としてまとめています。まず1年目は棚田の水の流れを調査し、2年目は水と暮らしの関わりを古民家の調査から考察。3年目の今年は、地元の方に昔の暮らしぶりについての聞き取りをした結果を踏まえてカルタの読み札と絵札を作ろうとしているところです。最終的には、地域の拠点となる小屋を学生が地元仰木の人たちと一緒になって自分たちの手でつくる構想です。

森　大学内に【キャンパスが美術館】を整備されたのも、地域との関わりからなんですか？

近藤　はい、そうです。本学は、学生数が約900名の大学ですが、規模の拡大を求めず、質と芸術大学としての特色を大切にしたいと考えています。そうした経緯の中で、一昨年の創立90周年を機に、キャンパス全体を美術館のようにしようと決めました。「いつ行ってもさまざまなギャラリーでおもしろい展示をし

「近江学」が興味深いですねえ（森氏）

私が関わったのは「大津絵踊り」からです（近藤氏）

ているな」「成安の学生はこんなことをやっているのか」「地域との連携がこんな形に仕上がったのか」と本学に来てくださった方に感じていただけるように、地域社会に公開したいと考えているんですよ。

森　地域に密着した大学の新しいあり方として、たいへん興味深いです。

近藤　平成21年に滋賀県文化振興条例ができて、行政も県民が文化芸術に触れる機会を少しでも増やし、また伝統芸能を守ることで芸術文化を振興しようとしています。しかし、行政にはこの分野でのノウハウがあまりないので「民」の力を借りたいということで、成安造形大学としてもより積極的に取り組むために「地域連携推進センター」をスタートさせました。『文化で滋賀を元気に！』を合い言葉として、滋賀の文化活動を活性化しようと活動を続ける任意団体「文化・経済フォーラム滋賀」にも積極的に協力しています。

　滋賀県は県民が芸術に触れる場がなさすぎる。それをなんとか少しでもきめ細かく埋めていくことが「芸術による社会への貢献」だと本学もがんばっております。

地元の伝統を守り伝える大津絵踊りプロジェクト

近藤　地域の歴史や伝統を学ぶさまざまなプロジェクトにも力を入れています。たとえば2010年に行った体験型授業「大津絵踊り」もそのひとつです。

森　大津絵踊りというものがあるんですか？

近藤　あるんですよ。大津絵踊りは大津市の無形民俗文化財に指定されています。京都の花街を代表する祇園など26府県に伝承されていますが、発祥の地・大津では消えかかっているんです。

　動物や植物はレッドデータブックといって絶滅危惧種を保護する活動がありますが、文化芸術にはそれがないんですね。保護しないと消えていってしまいそうなものが社寺の行事をはじめ、滋賀県にはいっぱいあります。

森　大津絵はわかりますが、大津絵踊りは知りませんでした。

近藤　大津絵踊りは江戸時代初期から大津の大谷や三井寺のあたりで売られていた大津絵から生まれた芸能で、もととなった大津絵は三井寺の仏画を起源としています。たとえば鬼の絵では必ず角が片方折れている。両方そろっている鬼はいないんですね。これは自分はまだ未完成だという教えを鬼がしているのだそうです。それを東海道をゆく通行人のみやげとして売り出し、信仰としての仏画からやがて独特な戯画風のおもしろさで全国に広がっていきました。いつしか花街で大津絵の画題の面をつけて踊るようになったそうです。ご存知ない方も多いのですが、大津には柴屋町という花街が

ありました。江戸時代には琵琶湖の水上運送が盛んで、浜大津には各藩の蔵屋敷が軒を連ねていました。その蔵を管理する役人がいっぱいいたため、大津は夜も賑わっていたんですね。

そういう歴史のある伝統がすたれてしまってはいけないということで、成安造形大学から提案をして授業に組み入れました。

森　なるほど、勉強になります。滋賀県人は滋賀県の文化や歴史に興味がなさすぎると、この間も叱られたばかりです（笑）。

近藤　そうです、みんな地元の文化や美しさに気づいていないことが多いんですよ。

森　大津絵踊りの授業はどういったことをされたんですか？

近藤　「大津絵踊り保存会」の方にご指導していただいて踊りを稽古するのと同時に、大津絵の歴史など伝統芸能の背景や意味、伝統継承の大切さとむずかしさを授業を通して学びました。集大成の実演発表は大津市の伝統芸能会館の能舞台で行ってきました。

知識を媒介にした人づくりこそが教育

近藤　ところで、貴社の社是は「過去には感謝、現在には信頼、未来には希望」ですよね。哲学者で、戦後、吉田茂内閣の文部大臣であった天野貞祐さんにつくっていただいたというあの言葉を聞いたとき、自分の心にものすごく響くものがあったんですよ。そういう思想を企業風土としてもっておられるということに非常に感激しました。というのは、私は天野貞祐先生の教えに若い頃から惹かれ、尊敬していたからなんです。

森　「過去には感謝、現在には信頼、未来には希望」は確かに名言ですね。外国では「過去には感謝」という考えがあまりないそうです。日本人特有の倫理観らしいのですが、大事なことですよね。しかし、いまは天野さんを知らない人が多いのではないでしょうか。

近藤　天野先生との出会いは、私が銀行に就職したばかりの昭和28年に出版された「昭和文学全集」の第10巻でした。その巻に天野先生の著作が収録されていて、全体と個、つまり全体の中で個人がどういう位置づけで何を考えて行動しなくてはいけないのかなど、いろんなことが書かれています。人生に行き詰まったとき、いつもこの本を開いて天野先生の教えを繰り返し読みました。

森　ひとつの著書を読みこむ読書体験は非常に大事なことですね。ところが最近の教育では理数系ばかり重視したり、小学校1年生から英語を習うようにしたり。日本語は自然に覚えられるが英語は教えないとわからない、経済人として社会で活躍するために小学校1年生から英語教育が必要だとかね。天野さんのような思想や心の問題は意味がないといった風潮ですけれども、それは改めないといけないですよね。

近藤　おっしゃるとおりです。教育というのは知識を媒体にしての人格の陶冶、つまり人づくりを目的とするのが天野先生の教育論なんです。知識はあくまでも媒体であって、知識を覚えこませることが目的であってはならない。知識はどういう人格に使われるかによって良くも悪くもなる。ゆえに、知識とともに

❶ 天野貞祐先生がつなぐ心の交流を実感する両氏
❷ 天野氏の著作が収められている『昭和文学全集』
❸ 天野貞祐氏

人格を育むのが教育の原点だと。

森　人づくりについていいますと、経済成長というのは企業が成長することを志しているのであって、人が幸せになることはいっさいやっていないと思えるんですね。経済には無駄を省いてコストを下げるという大前提があるので、人を減らしてコストを下げようとする……。そこで、中小企業にしかできない持続可能型社会における企業経営を考え、何冊か著書としてまとめました。

　たとえば「生産者」と「消費者」という分け方をしますが、実際は消費専門の人なんてどこにもいない。どこかで働いてお金を稼いで、そのお金で消費しているわけですから、みんな何らかの生産的な労働をやっている。そういう意味で、みんな一体なんですよ。消費者は外国製品でもコストが安いものを買う権利と自由があるという考えが広がっていますが、そもそも生産者が生活できないような値段で買おうとするのは大きな間違いです。そういう考え方を変えていきたいというのが私がいま一番思っていることなんです。

近藤　私は現代社会のさまざまな問題の原因のひとつは、日本の雇用形態の現状だと思います。非正規雇用なんていうものをこれだけ広めてしまったのが問題。いつ雇用期限が終わって解雇されるかわからないところでは、人材育成はできないんですよね。

　地域づくりをはじめ、持続可能な社会や企業経営について考えておられる森会長には、いろんなところで発言していってほしいと思っています。

日本の再構築のため哲学と読書を

近藤　私が最近考えているのは昨年の3・11。震災直後に日経新聞の「私の履歴書」で安藤忠雄さんが書いておられたことが心に強く残っています。日本人はもう一回再出発をしないとだめになる。そのためには人の痛みがわかるとか地域を愛する、親を大事にするといった本来日本人がもっていた良さをもう一回復習をしてやり直すところから始めなくてはいけない。大震災後の日本の再構築の原点はそこにあると。なるほどと思いましたね。

　自然を壊さない建築、そして仕事は学歴ではないことを実証された安藤さんの言葉はやはりすばらしいと思いました。

森　日本が大きな転換点を迎えているいま、思考法を変えなくてはいけないですね。

　若者はみんな非常に不安を感じている。ところが、既存の宗教はお説教ばかりするから若者が離れていってしまう。行事をたくさんしたりお説教をするよりも先に、若者の話を聞かないといけないと私は思います。また、私たちの世代は時代があまりにも急激に変わったため、道徳観を若者に伝えてこなかったという反省もあります。われわれ世代が一生懸命そういうものを伝える努力をしていきたいですね。

近藤　いまの世相の乱れをみていると、宗教が私たちの思考や行動に及ぼす影響が変化してきていることも原因のひとつではないかと思えます。そして哲学者はもう少し勇敢に、人間としてあるべき姿をもっといろんなところで示してほしいですね。そもそも哲学を支える教育体制が悪いと思います。

森　以前、弊誌で鳥取環境大学初代学長の加藤尚武先生と対談をしていただいたことがあります。ヘーゲルの研究家として著名な哲学者で、死の倫理など現代の倫理学についてわかりやすく細かく解説された本をだしておられます。ああした本こそ読まれなくてはいけないと思いますが、現代では哲学書を読む人は少ないんじゃないかという気がしますねえ。

近藤　いまのメディアでザッと文字を読んでも頭には入らないんですよ。

　先ほど話しました天野先生は読書論の中で、なぜ読書をしなくてはいけないかというと、それは誰にでもできるからだと書いておられます。発信する側は一人の著者ですが、読み手はみんなレベルが違う。レベルが違うから、理解に要する時間にも差がある。一度さっとみたらわかる人と、三回も四回も読み直さないと理解できない人がいる。それから理解の程度の深まりにもみんな差があるけれども、読書というのはそれを全部自分のペースでできる。2時間で読める人がいる

本を5時間かかって読んでもいい。納得するまで読みこなしたら、必ずそれは身につくから読書は人づくりのためには絶対に必要だとおっしゃってるんですよ。

森　パソコンでみるのではなくて、やはり本を読むことですね。

地域と連携した芸術振興から教育論、読書論、日本人のあるべき姿まで今日は多岐にわたるいいお話をありがとうございました。

大野俊明教授の作品の前で

■近江学第4号

- 発行／成安造形大学付属近江学研究所
- 編集／辻喜代治
- 価格／1800円+税
- 内容／写真とエッセイで文化を巡る。芸術・歴史・民俗・思想・自然環境などの各分野にわたって、確かな発達の足跡が数多く見られる近江の美を再発見。

近藤功　夕陽を楽しむ　志は高く

●こんどう いさお＝1930年、京都府生まれ。同志社経済専門学校卒業。1951年に株式会社滋賀銀行へ入行。1997年同行代表取締役専務任期満了退任後、滋賀県監査委員を2期8年務める。2007年に学校法人京都成安学園理事に就任、2009年同理事長に就任。NPO大津絵踊り保存会を設立し、江戸時代から伝承されてきた大津市無形民俗文化財の保存会初代会長を務める。

森　建司　勇気凛々　心の壁を打ち破れ

●もり けんじ＝1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会相談役など

〈著書〉『吃音はなおる』遊タイム出版、『循環型社会入門』新風舎、『中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営』サンライズ出版、『中小企業相談センター事件簿』サンライズ出版

〈未来創成『私たちが変える』〉

滋賀の新たなものづくりと持続可能な地域モデル

嘉田 由紀子
滋賀県知事

辻 信一
明治学院大学教授・
ナマケモノ倶楽部世話人

上田 洋平
滋賀県立大学
地域づくり教育研究センター 研究員

森 建司
循環型社会システム研究所 代表

東日本大震災と福島の事故によって混迷の度を深める現代日本。地域に根ざした持続可能な新たな社会を実現するために、いま私たちは何を目指し何をするべきなのでしょうか？　滋賀の活性化に向けて女性の視点に立ち手腕を発揮されている嘉田由紀子滋賀県知事、「スロー」な生き方を提唱する文化人類学者・辻信一さん、滋賀県立大学研究員の上田洋平さん、弊誌代表の森建司に、それぞれが描く日本の未来について忌憚のない意見交換をしていただきました。

■旧大津公会堂 大津グリル（大津市）
■2012年7月15日

地域へと回帰する若者が日本に新たな潮流を生む

上田　辻さん、昨日行かれた甲津原の里おこしイベント「伊吹の天窓（てんまど）」はいかがでしたか？

辻　ローカルなイベントにあれだけの人が集まっていてビックリ！　そして、それぞれの思いをしっかり伝えられる若い人のコミュニケーション能力の高さにびっくりしました。コンサートも地元出身のミュージシャンたちが自分の思いを切々と語りながらやっている。当事者意識がはっきり出ていて気持ちよかったですね。いい意味でローカル色が強いことが印象的でした。

嘉田　「伊吹の天窓」が開催された甲津原は奥伊吹の一番奥。昭和49年には若い人が次々に都会へと出ていってしまって、かなり過疎化が進んでいました。それを思うと、奥伊吹の奥に１０００人近い若い人が集まったというのは隔世の感ですね。地元の動きに外の人が加わった「伊吹の天窓」は将来を象徴する動きになると思います。

上田　「隔世の感」というのは？

嘉田　ベクトルが変わったということ。かつてはみんなが都会へ都会へと向かった。過疎化では若い女性から先に抜けていくんですよ。それが今度は、まず若い女性が都会から戻ってきてがんばっている。女性が戻ってくると若者が戻ってきて。このベクトルはいままでの日本の社会にはなかったんじゃないでしょうか。

上田　これまでとは違う本物の動きということでしょうか？

嘉田　そう思います。米原市の甲津原・曲谷・甲賀・吉槻の４つの集落を合わせた東草野地域には、人や自然といった日本が本来もっていたものを求める思いが結集しています。

森　滋賀県内のあちこちでいろんな動きがありますね。湖北町には清水陽介さんの「どっぽ村」がある。ここには、東大大学院で学び一級建築士の資格をもつ青年が木造建築がやりたいと来たり、アメリカの証券会社で多額の報酬を受けとっていた人が月給10万円で働いていたり。やっぱり地域に対する憧れがあるのでしょうね。

上田　嘉田知事がおっしゃった「ベクトルが変わった」という言葉を辻さんはどう思われますか？

辻　世界のいろんなところを歩いて日本の各地にも行ってみて、確かに流れが変わってきていると感じています。若い人たちが違う方向へと歩き始めている。ところが、僕らの世代はそれがわからない、みえないんですよね。

　僕がいまものを考えたり、行動するときの基点になっているのは昨年の３月11日。震災翌日、これからを「ポスト３・１１時代」と名づけようと思いました。それぞれの人の思惑とは関わりなく新しい時代がきたと考えようと。そこで何ができるか？　発想の大転換が必要だと思いました。そういう意味で、嘉田知事があげられた流れこそがまさに「ポスト３・１１時代」の先駆けといえる。しかし、あれから１年半近く経とうとしているいま状況はどうでしょうね。

嘉田　政治家にしろ企業にしろ力をもっている人たちは３・１１後がわからない。認識が変わらないまま３・１１前と同じことをやっているから、ここまで不信が

リードする」（森氏）　「本物が生き残る」（上田氏）

高まっているんです。

辻　その変わらなさは凄まじいですよね。

森　経済も含めたあらゆる面でたいへんなことになると薄々気づきながらも、ほんとうにたいへんな事態に飛びこんでしまう時代がまもなく来るんじゃないかと思います。そういう時代が実際に来ないとわからない人たちが多すぎる……。

上田　京都の綾部で「半農半X」を提唱している塩見直紀さんは、3・11を経てもこれほどまでに変わらないことに驚いたといっておられます。甲津原では「伊吹の天窓」のような新しい潮流の芽生えがあって、他方では驚くほどの変わらなさがある。

ところで、辻さんはフェイスブックで、反原発のデモにいった学生からのメールに感動して「僕は新しい時代をつくっている若い世代の後ろからついていこう」とコメントされていましたね。

辻　いまの気持ちをひと言でいうと「申し訳なさ」。いま生きている人たちだけでなく、世界に対して、未来に対して、ほかの生きものに対しての申し訳なさ。僕はこういう社会をつくってきた世代の一員ですから。ところが、その申し訳なさを共有できないのが僕らの世代。それがほんとうに情けない。

嘉田　私が知事になったのは、ここまで先送りしていては次の世代に責任が持てないじゃないか、このままだとベクトルが戻せない、という危機感から。3・11前から借金をできるだけ減らして、子どもと若者の未来と自然を守りたいといってきました。これは「もったいない、おかげさまで、ほどほどに」という『M・O・H通信』の方向とまったく同じ。ところが、3・11で変わるどころか守旧派が盛りかえしてしまった……。

森　幸いにも滋賀県には、そういう視点でものを考える女性の知事がいらっしゃる。21世紀はビジネスも政治も女性が主導権をもたないといけないと思っているんですよ。男が考えると世界における我が国のGDPの順位だとか、宇宙の果てまで調べるといったことばかり。それよりも目の前の現実に目を向けるという、男とは違った感性が女性にはあると思います。

近江の〝食〟を通して地元を見直してほしい

上田　今回のテーマ「未来創成」についてお話を進めていきたいと思います。冒頭で若い人たちが地域に戻ってきているというお話がありました。そうすると、戻ってきた若い人たちがずっと持続的に食べていけるように考えなくてはいけません。何か具体的なアイディアがありますか？

辻　以前、『M・O・H通信』にも登場された「非電化工房」の藤村靖之さんとまもなく大きな破綻がくるだろうという話をしたことがあります。破綻がどこから始まるのか、何をきっかけに始まるのか、どんな形の破綻なのかはいろいろありえますけど、いずれにしても凄まじいことになるだろうと。かつて2000年問題で、ちょっとしたコンピューターの狂いですべてのシステムが滞ってたいへんなことになるのではないかといわれました。あのとき、いかに脆い土台の上に僕たちは生きているのか改めて考えさせられました。

右から「申し訳なさ」（辻氏）　「ベクトルがかわった」（嘉田氏）　「女性の感性が

森　そうですよね、東電の人がボタンひとつ押し間違えたらと思うと……。

辻　ではどうしたらいいのか。仕組みそのものを全面的に変えていかなくてはいけないんだけれども、それが間に合わない。とすれば、どんなに小さくてもいいから自前のモデルを地域的にたくさんつくっていこう。モデルがたくさんあれば、重大な事態が起こったときに人々は絶望することなく、「こういう道筋があるんだ」と思えるだろう。そうしたモデルづくりを淡々とやっていこうと藤村さんと話しました。

嘉田　地域モデルは滋賀の志です！

上田　滋賀の地域モデルとは？

嘉田　衣・食・住・エネルギーをどれだけ自前でつくれるかです。

上田　具体的にはどういうことを？

嘉田　知事になって「おいしが うれしが」キャンペーンを始めたんです。滋賀のものを見直す第一歩として、まず食を取りあげました。それまで滋賀産の農作物は京漬物など京都ブランドの食の材料でしたが、滋賀を打ちだしていこうと「近江茶」「近江野菜」と近江、滋賀を

「おいしが うれしが」と道の駅（嘉田氏）

前面に出していったんです。今では「おいしがうれしが」キャンペーンの推進店は1000店ほどに増えました。

上田　滋賀の農作物は、かつては名前を変えて京都のものとして売られていたんですね。

森　弊誌では生産者と消費者をつなぐ交流会「よばれやんせ湖北」をやっています。非常に好評で守山と大津でも始まりそうなんですよ。自分の地域の特産品を生産者が直接消費者にPRする場であり、消費者が「こんなものがあるのか」と発見する場をつくりたいと始めました。

嘉田　滋賀の野菜は、都会つまり消費者に近いのが強みだと思います。農水省のように産地を大規模化する政策では、結局は産地がどんどん崩れていってしまいます。

森　これまでの政策は経済至上主義の考え方で農業をみているんですよね。

嘉田　そうです。そして「おいしがうれしが」とセットになっているのが直売所の存在です。県内でも100か所ぐらいになりました。たとえば、それまで大根を作っても出荷するところがなかったお年寄りも、直売所ができて小遣いが稼げて、お嫁さんにも見直されたって元気なんですよ。ほんとうは大根そのものの価値をお金を介さずにみてほしいけれど、お金を介することによって、お年寄りは自分の作る大根の価値を見出したんです。

上田　これまで誇りを捨ててお金をもらっていたのに対して、売ったプライドを取り戻しているのが、滋賀でいま起こっている地産地消の取り組みなんですね。

つくり手の心を伝える新たなものづくりを

自前のモデルをつくろう（辻氏）

森　企業経営の立場からいいますと、私たち中小企業は大企業の下請けばかりしてきた。滋賀県の方針に「ものづくり」とあるのですが、それは大企業の優秀な下請けを育てるということで、決して自立型ではなかった。だから滋賀県に雇用がたくさんあるといっても、滋賀県に本社をもっている企業で働くというより大企業の滋賀工場で働く人が多いのが現状です。

嘉田　部品供給型なんですよね。

森　いま滋賀から撤退する大企業が増えて、中小企業は経営が成り立たなくなってきています。これからは自立型の地域産業をおこしていくしかない。そのために地産地消を呼びかけて、作った人

売ったプライドを取り戻す（上田氏）

や売っている人が食べていける適正価格で買いましょうと運動しています。

最近は、食だけでなく他の商品も滋賀県産とアピールするものがでてきましたね。

嘉田 「メイド・イン・滋賀」ですね。

森 外へ広く売って滋賀県の経済を盛りたてようという考え方もありますが、それよりもまず滋賀県の消費者に向けた商品を滋賀県の企業がつくっていこうと「滋賀・地産M・O・H市場」発足を計画しています。その一環として滋賀県の特産品の常設展示会館もつくりたいと考えていて。

いままでのようにコストを下げるために機械化して大量生産した商品ではなくて、職人の手によるもの、職人の心が通うもの、買う側も職人の心意気に感銘を受けて買うようなものをつくる。つくる側は買う人の心意気に応えようとして一生懸命ものをつくる。そういう関係を取り戻したい。まずはネットワークの活動を通して、そういう考えでつくられたものを各地で広めたいと思っています。

嘉田 県では新製品の開発を促すために「しが新事業応援ファンド」を立ちあげました。地域でもイメージでもいいからとにかく滋賀らしいものに付加価値をつけて売りだせるようにと考えてのものです。企業でもNPOでも任意団体でもいい。

上田 任意団体でもいいんですか？

嘉田 はい。新しいアイデアというのは一人、二人から出てくるんです。組織を大きくすると、みんな周りをみてしまって発想が新しくなくなる。だから、たとえ一人でも任意団体をつくったら助成をしています。その結果、ずいぶん新しいアイデアが出てきました。たとえば外来魚を使った沖島のコロッケやペットフード、竜王町古株（こかぶ）農場の発酵チーズ、葦を織りこんだ浜縮緬のブックカバー。信楽では光る陶器による手洗い鉢、愛荘町では倉庫に残っていた明治のリネン糸を織りこんでリネン生地を作ったり。

森 いいですねえ。こういう商品を一般の人にもそこへ行けば買えるという形で紹介したいですね。

上田 いいものをみつけてきてつないでいくということですね。

森 これから滋賀県の産業をおこしていくには中小企業が力を発揮しないといけないと私は思っています。

辻 それは滋賀県に限りませんね。巨大企業を中心に世界がつくられていて、それではまったく持続不可能。企業という

滋賀・地産M・O・H市場をつくりましょう（森氏）

のは本来ローカルに根ざしたものである、という原点に立ち戻る必要がある。みなさんが話されている滋賀での動きは、実は世界のモデルになりうると僕は思っています。

「チッタ・スロー」を牽引する「カフェ」

辻　地産地消という言葉がでてきたので、ローカルな経済とはどういうものなのか基本的なところについて少しお話ししたいと思います。

いま世界的な流れのひとつとしてイタリア発の「チッタ・スロー」があります。訳せば「スローな町」。スローフードから出てきた名称で、地域が食だけでなく生活全般にわたって健全で持続可能であるための道を探ろうという運動です。このチッタ・スローとヘレナ・ノーバーグ＝ホッジ監督が『幸せの経済学』で描いたローカル化のモデルとして、滋賀ほどの場所はないんじゃないかと思っています。

上田　なぜそう思われるのですか？

辻　まず、本物のエコロジストで非常にホリスティックな知事がいる（笑）。そして、実際に滋賀のいろんな市町村でおもしろい動きがたくさんある。だから海外の人と日本の話をするとき、僕は必ず滋賀のことに触れます。

嘉田　うれしいですねえ。

辻　ノンフィクション作家の島村菜津さんが、イタリアの地方の町の活力の源として、人々の憩いの場所である「バール」に注目していますが、日本各地で「カフェ」が同様の役割を果たしはじめている。若い世代が起業するカフェに人が集まり、それが町づくりの拠点になり、町に元気がでてくるという例が日本各地でみられます。

上田　東近江の「ファブリカ村」がそれですね。森会長が話されたように、大量生産による均質のものを分けるというのがこれまでの原理で、これからはカフェあるいは地産地消の販売所といった〝混ざる場所〟があちこちに散らばっていて、それをネットワークでつなぐ。こういう生き方がでてくるじゃないかという気がします。滋賀にはいろんな資源…自然の恵みも歴史の恵みもある。でもいま一番元気なのは人の恵み、人が出会うことじゃないかと思います。

エネルギーから看取りまで東近江にみる地域モデル

辻　経済評論家の内橋克人さんが提唱している「FEC自給圏」。Fはフード、Eはエネルギー、Cがケア。ケアは広い意味の福祉、ローカルな自前のケアのことです。彼はこの3つの自給を経済の基本にしないといけないといっている。これはヘレナの『幸せの経済学』に非常に近い考えです。

嘉田　滋賀では先ほど触れた東近江市で、市民共同発電所が元気です。みんなで出資して農産物直売所「八日市やさい村」や「FMひがしおうみ」の屋根に太陽光パネルをつけて、収益はその地域の店で使える地域通貨として還元するというもの。自分たちでエネルギーを作り、地域通貨という金融システムまで含めた地産地消の取り組みが東近江モデルです。これが他の市にも広がってきています。

辻　それは3・11の前からですか？

嘉田　ずっと前からです。さらに、東近江には「FEC自給圏」のC＝ケアに関しても新しい芽が生まれつつあります。死を病院から地域と家族に取り戻そう、命のバトンタッチを子どもたちに伝えようとしています。

上田　在宅看取りですね。

嘉田　はい。県の在宅看取りの政策にもとづいて、東近江では保健所が中心になってお医者さん・看護師さん・薬剤師さんたちが協力して、自宅で最期までケアできる環境を整えています。

辻　東近江といえば、写真集『恋ちゃんはじめての看取り』をみました。あれはほんとうにすばらしいですね！

嘉田　あの写真集は、自治医科大学を卒業して東近江の永源寺診療所長として在宅医療に関わっておられる花戸貴司さんというお医者さんに、戦場写真家だった國森康弘さんが同行取材して撮影されたものです。

辻　経済成長などに浮かれていて、社会が生老病死に向き合えなくなっている。生まれてくる子どもをどう迎え、どう育てていくのか。そして死んでゆく人をどう看取るのか。このふたつは一体で切り離すことができません。

いま求められているのは「モノ」より「モノガタリ」

森　去年、私は半年間ガンで入院していたんですよ。死を前にすると人生観変わりますね。お金なんていったい何の魅力があるのかと思えてきて。いまの経済社会は「モノの価値」しか認めない。もう少し「心の価値」を尊重しないといけないですよ。

嘉田　そう、そこなんですよ！　いまの若い人たちはモノ以上にモノガタリを求めているので、それは次の経済の大事な意味づけになってきます。これは誰々さんがつくったものとか、いろんな人の手を経ていま私のところにあるといったモノガタリをみんな求めている。それこそが新事業応援ファンドで求めているものなんです。

上田　モノをつくる産業ではなくて、モノガタリをつくる産業ですね。

森　それはおもしろいですね！　それはひとつのテーマになりますよ。地産地消の自立型経済をおこすネットワークをつくりたいと考えているんですけれども、産業のネットワークに「モノガタリ産業」という発想を使わせてもらってもいいでしょうか。

　みなさんのお話を聞かせていただいたことは今後の弊誌の運動にとって非常に有意義でした。今日はお忙しい中、ほんとうにありがとうございました。

■恋ちゃんはじめての看取り

- 著者／國森康弘
- 発行／農山漁村文化協会
- 価格／1800円+税
- 内容／おおばあちゃんの死と向きあう恋ちゃん(小5)の想いをたどりながら、あたたかな看取りの世界を臨場感あふれる写真・文で描く。

■月になったナミばあちゃん

- 発行／／國森康弘
- 著者／農山漁村文化協会
- 価格／1800円+税
- 内容／一人暮らしのナミばあちゃんを支える家族や地域の人、医療関係者の交流をたどり、在宅での最期を可能にした看取りの現場を描く。

市民の力で活気を取り戻した旧大津公会堂をバックに。サティシュ・クマール氏の講演でも若い人を多く迎えた。

まっすぐに、しなやかに
嘉田由紀子

●かだ ゆきこ＝1950年、埼玉県生まれ。アメリカ・ウイスコンシン大学大学院修士課程、京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。農学博士。琵琶湖研究所主任研究員、琵琶湖博物館総括学芸員、京都精華大学人文学部教授を経て、2006年7月より滋賀県知事に就任。現在二期目。趣味はカラオケ、孫と過ごすこと。特技は手打ちうどん、地図が読める。座右の銘は「まっすぐに、しなやかに」

ゆっくりと、とーーーーーくまで
ナマケモノ教授 辻信一

●つじ しんいち＝明治学院大学教授。環境運動家。1999年に環境文化NGO「ナマケモノ倶楽部」を設立。以来そのリーダーとして、スローやGNHをキーワードにスローライフ運動を展開する。「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表。著書に『スロー・イズ・ビューティフル』(平凡社)、『ハチドリのひとしずく』(光文社)など多数。最新刊に『ホーキせよ!〜ポスト3・11を創る』(ゆっくり堂)、『ナマケモノ教授のぶらぶら人類学』(素敬パブリッシング)。

URL：http://www.sloth.gr.jp/tsuji/index.html

文化はめぐみのめぐりあわせ
この「居合わせ」から「仕合わせ」を！
上田洋平

●うえだ ようへい＝1976年京都府生まれ。滋賀県在住。滋賀県立大学大学院人間文化学部地域文化学科博士課程単位取得退学。専門は地域文化学、地域学。「知恵の知産知消」を掲げ、風土に根ざした暮らしと文化に関する研究と実践に取り組んでいる。人々の「身識」をもとに地域のイメージを一枚の絵として表現する「心象図法」を開発し、滋賀県内を中心に各所で展開している。滋賀県新規採用職員研修「近江地元学研修」アドバイザー。米原市「ルッチ大学」アドバイザー。2011年度日本青年会議所「人間力大賞」受賞。

ueda.y@office.usp.ac.jp

森氏のプロフィールは16ページ

③ M・O・H通信からの提案
〈 未来創成『私たちが変える』〉

おしゃれな滋賀・地産 M・O・H市場（仮称）の創設案

「ものつくり産業」から 「ものがたりつくり産業」の創出へ

この度弊誌では、「滋賀・地産M・O・H 市場」を提案してみたいと思い至った次第です。もし、多くの皆さんのご賛同が得られて、いつかその夢が実現に向かって進んでいくならば、提案者としては大きな喜びです。

提案の背景

いま我々の社会は、このままでは持続が不可能かもしれないという大きな行き詰まりに直面しています。それは、現象としては地球規模での環境の危機、資源の枯渇、それと連動する世界経済、地域社会の崩壊などで、これらがいま一気に顕在化してきました。このような危機は、この世紀に我々が作り上げてきた「近代工業社会」そのものが、豊かさと引き換えにもたらしたといわねばなりません（図-1）。

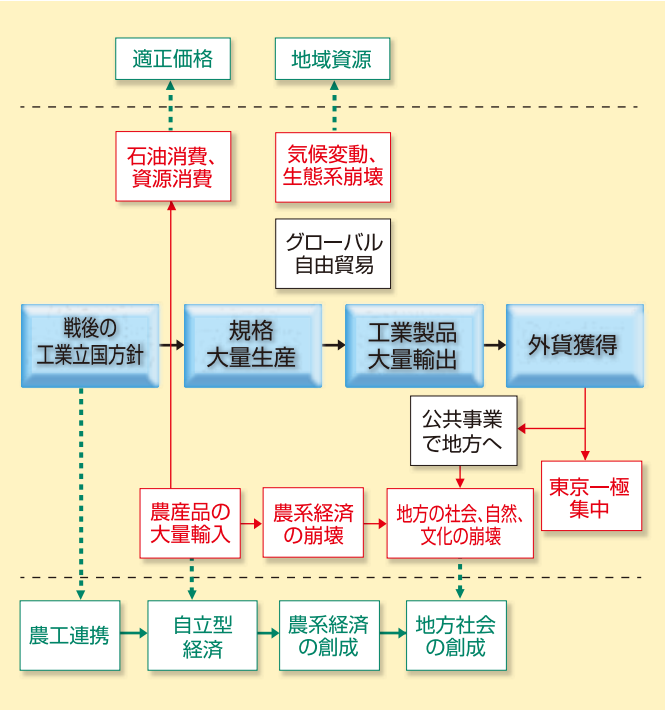


図 -1 戦後社会の発展と歪み

それを克服するためにはどうするか。それには近代工業社会の歴史を遡ってみることが必要です。その歴史的経緯を要約すると、「石油の大量消費」と「グローバル経済の過度の進展」といえるでしょう。この二つが主因となって、人類史上空前の豊かさと同時に地球環境や経済社会の様々な危機がもたらされました。

そこで、これからの方向としては、「石油をできるだけ使わない製品や産業」と「グローバルな経済から一定の距離を置く」経済システムを構築することでしょう。この方向性から考えられる地域戦略として、「地域の自然素材と地域の人材で作り上げた製品」をできるだけ作り、それを地域で使うことでしょう。最近、道の駅といった地域の特産品を販売する市場が、各地で見られるようになってきています。しかし、明確に前記の二つの原則に従って選択した滋賀全域の地産品を広く集めた常設的な市場といったようなものはまだ見られません。そこで、改めて「滋賀の素材と技術で作られた製品の一大集積場」としての『滋賀・地産エコ市場』の提案をしたいと考えた次第です。

「滋賀・地産M・O・H市場（仮称）」の特徴、期待すること

この滋賀・地産M・O・H市場のマーケットには多くのことが期待されますが、それらを17ページからの「嘉田知事・辻氏・上田氏・森氏の座談会」の中から抽出して順不同で挙げてみましょう。

【どのような特徴を持つか】

＊地域の特産品を生産者が直接消費者にPRする場であり、消費者が「こんなものがあるのか」と発見する場。

＊コストのために機械化による大量生産した商品ではなくて、職人の手による職人の心が通うもの。

＊買う側も職人の心意気に感銘を受けて買う。つくる側は買う人の心意気に応えようとして一生懸命ものをつくる。そういう関係を取り戻す場。

＊これまでお金を稼いでいたのに対して、プライドを取り戻すような、つくり手の心を伝える商品の場。

＊個人や小グループによる新しいアイデアの具体例、たとえば外来魚を使った沖島のコロッケやペットフード、竜王町古株農場の発酵チーズ、葦を織りこんだ浜縮緬のブックカバー、信楽の光る陶器の手洗い鉢、愛荘町では倉庫に残っていた明治のリネン糸を織りこんだリネン生地を紹介する場。

＊食だけでなく他の商品も滋賀県産とアピールする「メイド・イン・滋賀」。

＊こういう商品を一般の人にもそこへ行けば買えるという形で紹介する常設展示会館（または市場）である。

【期待されること】

＊いま滋賀から撤退する大企業が増えて、中小企業は経営が成り立たなくなってきているので、自立型の地域産業をおこしていくしかないが、作った人や売っている人が食べていける適正価格で買いましょうという趣旨で、一種のグリーン購入。

＊外へ広く売って滋賀県の経済を活性化するだけではなく、まず滋賀の消費者に向けた商品を地元の企業がつくっていく。まずはネットワークの活動を通して広める場。

＊巨大企業を中心につくられた世界は持続不可能。企業というのはそもそもローカルに根ざしたものである、という原点に立ち戻るためにこの滋賀での動きは、世界のモデルになりうる。

【変えたい、いまの仕組み】

＊滋賀の野菜は都会つまり消費者に近いのが強み。主産地形成で大規模化する政策は経済至上主義の考え方で農業をみていて、産地がどんどん崩れていってしまう。

＊滋賀県の方針に「ものづくり」とあるが、それは大企業の下請けを育てるということで、自立型ではなかった。だから滋賀県に雇用がたくさんあっても、大企業の滋賀工場で働く人が多いのが現状。産業自体が部品型である。

【それを支援する仕組み】

＊県では新製品の開発を促すために「しが新事業応援ファンド」を立ちあげた。イメージでもいいからとにかく滋賀らしいものに付加価値をつけて売りだせるようにとの意図。企業でもNPOでも任意団体でもいい。

＊新しいアイデアというのは一人、二人から出てくる。組織が大きいと周りをみてしまって発想が出なくなる。だから、たとえ一人で任意団体をつくっても助成をしている。

商品の選定

この滋賀・地産M・O・H市場に並べられる商品は、〝地域素材と地域技術〟で作られ、かつ〝折り紙つきの特産品〟であることが必要です。その両方の条件を満たす商品の選定が必要でしょう。

最終的にはびわ湖環境ビジネスメッセほどの大きな規模のものになるでしょうが、最初は小規模でスタートすることが現実的でしょう。製品の製造者が「滋賀の素材と技術」で作った自分の製品を持ち込むことが第一歩です。次に、それがどれほどの商品であるかを、審査委員会が審査して、認定した商品を展示、販売する問屋の形を取ることになるでしょう。消費者に安心して購入してもらえるようにすることです。さらにその商品の評価としては、特産品であることは勿論として、個人の仕事（腕前、商い）を評価したもの、高品質、長寿命で手作りの良さを再発見するもの、などが規準となるでしょう。

また、女性や若者に支持されて購買意欲を促進するような意匠のおしゃれさ、洗練されたデザイン性が重要な要素となります。

具体的な事業例

1．地域特産品の掘り起こし（個人の技術にも焦点）
2．地域別・業種別の振興団体の形成と育成
3．セミナー・展示会・イベント・交流会の開催
4．情報誌・カタログの刊行
5．公共支援の紹介・斡旋
6．滋賀県特産品会館・市場の開設（常設・卸小売りの実施）

本提案は、内藤正明・森建司両氏の監修により作成いたしました。
編集部

東近江市全景（山から湖までつながる）

東近江市の挑戦

山口 美知子
東近江市企画部緑の分権改革課 主幹

2006年8月に弊誌13号保存版『2030年自然と共生する滋賀の将来像』特集を発行した。ページ数108ページの、増刊号だった。当時は持続可能な社会、『MOTTAINAI』の故ワンガリ・マータイ女史来日、脱温暖化社会など、環境をキーワードに世論が大きく動いた時だ。滋賀県の取り組み「行政はどうする?」で、琵琶湖環境政策室 主任技師（当時）山口美知子さんが登場した。5年が経過し、彼女は東近江市の市職員となり、政策を実現するため東近江市を奔走した。今、彼女の想いと地域の想いが重なり、自立する東近江市へと姿を変えている。

緑の分権改革のイメージ

「緑の分権改革課」の誕生

〝緑の分権改革〟という聞きなれない言葉が生まれたのは、平成21年の秋。総務省が提唱したその言葉は、地域主権戦略大綱に位置付けられ、「地域資源を最大限活用し、地域の活性化、絆の再生を図り、中央集権型の社会構造を分散自立・地産地消・低炭素型としていくことにより、地域の自給力と創富力（富を生み出す力）を高める地域主権型社会」の構築を目指すという意味が込められたものです。

東近江市では、平成22年4月、全国で初めて「緑の分権改革課」を設置し、立場や分野を超えてつながる仕組みづくりによる課題解決へのチャレンジがスタートしました。

東近江市の特徴

東近江市は、人口、面積ともほぼ日本の千分の1のスケールであり、森林面積率や高齢化率、年少人口比率も平均値に近い数値となっています。また、鈴鹿山系から琵琶湖に至るまで、一つの市で源流から河口まで流域のすべてを包含しており、森林56％・農地22％を占め、人々の暮らしとともに自然豊かな生態系を形成しています。

都市と海以外は全てそろった当市においても、中山間地域や農村地域では過疎化と高齢化、都市部の開発地域では急速な人口や世帯の集中という偏りが見られ、日本の問題点もすべて抱えた縮図のようです。つまり、東近江市の成功モデルは日本の改革モデルになり得るということです。

さらに当市の特徴として特筆すべきは、市民の積極的な社会参画です。地域の課題を市民自らが発見し、その解決に向けて様々な活動を続けており、今その動きが分野を超えてつながろうとしています。

目指すべき将来像

当市が目指す緑の分権改革では、食とエネルギーとケアの自立を目標に掲げています。それらは、このまちで将来にわたり安心して暮らすために重要な要素であることは間違いありません。

しかし、これまでこれらの政策は「中央」で決定され、基礎自治体はそれに従うだけの関係でした。今後は、この目標を達成するために地域主権で課題解決に取り組む必要があります。

その際のキーワードの一つは「多分野連携」です。地域社会の課題は分野ごとに独立して発生するものではなく、いくつかの要因が複合的に絡み合って不都合な状況を生み出すものです。そこで、各分野の力を総動員して課題解決に取り組むことが求められます。

もう一つのキーワードは「お金の回る仕組みづくり」です。地域から出ていくお金を減らし、地域で循環させるための工夫が必要です。また、逆に地域に入ってくるお金を増やす工夫も必要です。それでは、具体的な内容を紹介します。

「食」の自立

持続的に安全・安心な「食」を支えるのは持続可能な農業です。兼業農家が多く、集落営農組織化が進む当市でも、従事者の高齢化や後継者不足は大きな課題です。それらの課題を解決するためには、次の3つの切り口があると考えられます。

①少量でも高付加価値なものを生産し商品化する、いわゆる超こだわり農業。
②一般的な兼業農家の営農組織による土地利用型農業。
③消費者目線で多様な関わりを提案する市民農園的な農業。

①は、市内でもすでに取り組んでいる農業法人等がありますが、問題は②の大多数の農家や集落営農組織です。国の政策等により米・麦・大豆が中心の経営形態ではかなり厳しいのが現状です。

そこで、③の消費者目線を味方につけながら、土地利用型の野菜栽培を進め、持続可能な農業を実現するため、市内4つのJA、ヤンマーアグリイノベーション㈱、愛の田園振興公社、東近江市が参加し、「東近江市フードシステム協議会」が設立されました。この協議会では、京阪神・中部へのアクセスの良さを最大限活かして、安定した価格と量を約束できる流通と生産の仕組みづくりを目指して活動しています。

東近江市フードシステム協議会の挑戦

「エネルギー」の自立

屋根を持たない人でも発電所を持てる「市民共同発電所」の仕組みは、市民がお金を出し合い施設等の屋根に太陽光パネルを設置するというものです。

八日市商工会議所では、「東近江市SUN讃プロジェクト」として取り組み、

市民共同発電所2号機

売電の収益金を地域商品券等に交換して出資者に還元する地域循環経済の構築を目指しています。

また、バイオマスエネルギーにおいても様々な取り組みがみられるのが東近江市の特徴です。愛東地区では菜の花プロジェクトの発祥の地としてBDF（バイオ・ディーゼル・フィール）生産を続けており、農業機械等に利用されています。

また、緑の分権改革調査事業がきっかけで生まれた「薪プロジェクト」は、雑木林の保全と獣害対策と障がい者雇用、バイオマスエネルギーの利用促進という複数の課題解決につながっています。さらに民間でも、農業用温室に薪ボイラー、温泉施設にチップボイラーがそれぞれ導入されるなど具体的な動きが始まっています。

三方よし商品券の流通

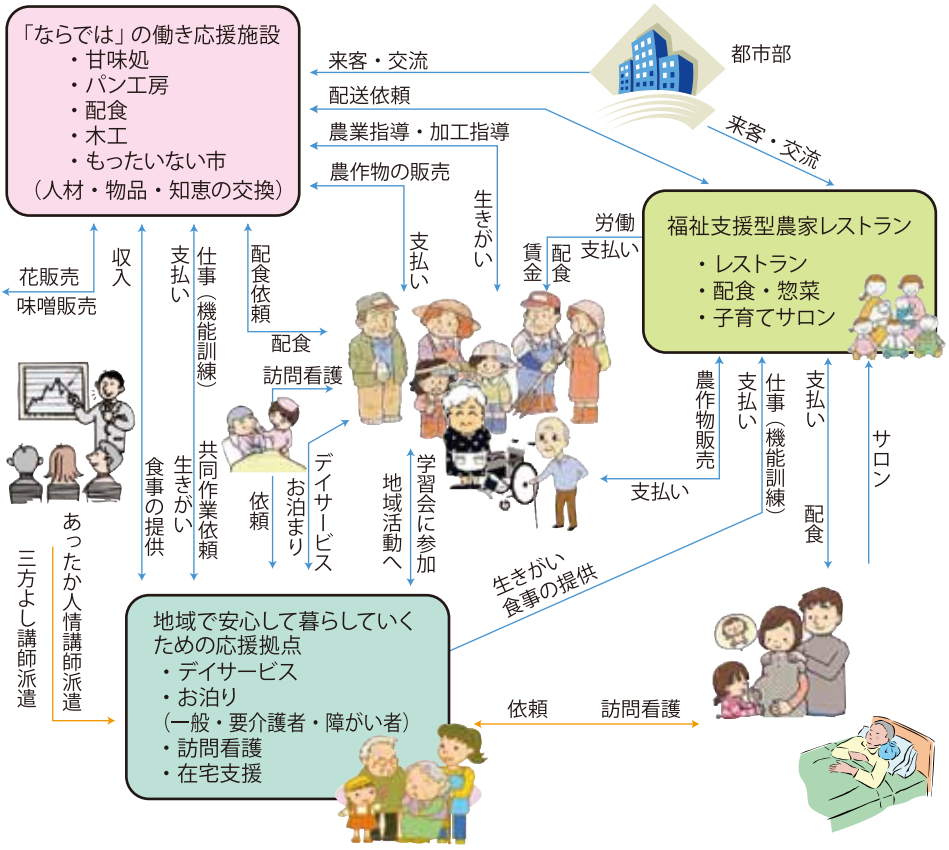
「ケア」の充足

生まれてから死ぬまで、この地域で安心して暮らすにはどのような仕組みが必要なのでしょうか？障がいがあっても認知症になっても関係なく、近くにサポートしてくれる仕組みがあれば…ということで提案されたのが福祉モール構想です。

市内の愛東地区を中心に、障がいのある方の働く場と高齢者のデイサービス、訪問看護ステーションなどを集め、地域の方が経営する福祉支援型農家レストランも併設するプロジェクトが進行しています。つまり、地域に相応の役割を作りながら支えあえる場、まさにショッピングモールのように福祉サービスが軒を並べるハードとソフトの融合です。

このように、地域に働く場・役割があ

薪プロジェクト



福祉モール構想図

ることは想像以上の効果を生みます。先に紹介した薪プロジェクトは、障がいのある方の「働きたい」を叶える場を提供しています。この職場での体験をステップに、就労につながった事例も生まれました。

農業や林業の仕事場では、失敗が許される幅があり、今後、たくさんの「働きたい」を実現することが期待されます。

終わりに…

緑の分権改革課には、対象範囲というものがありません。農林業、観光、まちづくり、福祉等々、テーマを挙げればきりがありません。したがって、限られたスタッフで何かをやるにも必ず限界があります。その時、私たちは何をやらねばならないか、を常に迷いながら考えています。

当市内では、ここに紹介した以外にも様々な課題解決につながる取り組みが、「知らないところで」日々進められていると想像できます。行政も含め、それらの目指すところは、大きな意味では共通していると考えられ、このように共通目的を持った集まりは、一つの「組織」と考えることができます。私たちは、限られた団体や限られた地域の経験（いわゆる「暗黙知」）を見える化し、それを「組織」としての地域の経験につないでいく、また制度や仕組み（いわゆる「形式知」）にしていくことが重要な仕事の一つであると考えています。また、明文化されている制度や仕組みを、具体的な団体や地域に当てはめて、大きな目的を実現していくことも求められていると考えます。

その第一歩が、「魅知普請」という冊子の発行でした。

■魅知普請
～魅力と知力と民力でつくるまち～
●発行／NPO法人愛のまちエコ倶楽部・東近江市
●印刷／新江州株式会社
●デザイン／伊達デザイン室
●内容／「緑の分権改革」に取り組む東近江市。目指すところは食・エネルギー・ケアの自立。同市の新しい価値を見出す取り組みを紹介。

この冊子では、東近江市内で活躍する皆さんを紹介しています。今後、財政がますます厳しくなる中での行政の役割…まだまだ手探りでありますが、地域の皆さんとともに悩みながら前に進んでいきたいと思っています。

生きる 山口美知子

●やまぐち　みちこ＝1972年滋賀県生まれ。東京農工大学大学院農学研究科環境・資源学専攻修了。1998年に林業技師として滋賀県入庁。琵琶湖環境部林務緑政課、大津林業事務所を経て、琵琶湖環境政策室時代には「持続可能な滋賀社会づくり構想」の素案検討において、中心メンバーとなった。その後、東近江地域振興局森林整備課（現、中部森林整備事務所）へ異動し、湖東地域材循環システム協議会（kikito）の立ち上げに関わるとともに、持続可能な東近江市を検討する「東近江市環境円卓会議」の運営に協力した。2010年から東近江市派遣となり、企画部緑の分権改革課に配属。2012年3月滋賀県を退職し、東近江市職員となった。プライベートでは、自宅のある栗東市金勝地域で、家族とともに棚田をつくりながら田舎暮らしを楽しむ。

「農」の可能性と「地域創成」

～淡路島からのメッセージ～

木田　薫
南あわじ市活性化委員会委員長
南あわじ市大学誘致推進協議会副会長

２０１０年12月に弊誌30号『絆』特集では、〝しなやか&パワフル、女たちのまちづくり〟と題して、近畿圏アクティブウーマン座談会を掲載した。兵庫県南あわじ市社会教育委員長・木田薫さんの、「ＩＬＯＶＥ 南あわじ」パワーが炸裂したことは記憶に新しい。２年が経過し、彼女の願いが吉備国際大学・地域創成農学部の誘致で実現した。廃校になった県立高校跡地の再利用、農業後継者のみなさんとの協働というおまけもついて、南あわじ市は活気づく。

We love

皆さんもすでにご存じのとおり、この国の農業に従事する人口は、下降線をたどっています。その数は、20年前の半分、その上、農業就業人口の６割以上が65歳以上の高齢者です。それに伴って耕地面積も大幅に減っています。

私どもの南あわじ市は、農業においては全国でも有数の大生産地と言われていますが、それでもやはり農業従事者の高齢化が加速度を増し、あと10年で農業の担い手がいなくなるといわれています。さらに農家に生まれた子どもたちは、農業といえば、「きつい、儲からない…」とのイメージがあるようで家業（農業）を継ぎたいと思う子は少なく、親もまた、こんな先行きの見えない農業を継がせるよりは、都会で大企業に就職することがその子の幸せだと島外に出そうとする人が大半です。

このままでは後継者不足はどうすることもできません。このことは、農業が主要産業である南あわじ市にとっては致命的な状況であることは言うまでもありません。

ところが一方では、「農業がやりたい！」という都会の若者が「Ｉターン・Ｕターン」といった形で、この淡路島にも移住する人が徐々に増えているのです。特に、有機野菜等の食材を自らの手で作り、その食材を使ったレストランなどを経営する人が増えています。また、ハーブやズッキーニなどの西洋野菜を栽培し、独自の販売ルートを持って生業を見出している人達など、私自身、たくさんの方と出会うことができています。その方たちのお話を聞いてみると「淡路島ってすごく魅力的ですよ。自然豊かで、食材が豊富で、阪神間との距離がほど良くて…。」「周りのお友達に淡路島に移り住むって言ったら、〝うらやましい～〟ってみんな言いますよ。」って感じで答えてくれます。

この島に魅力を感じられないのは、意外とここに長く住んでいる人たちなのかもしれませんね。こんな話をしていると、屋久島の研究をされている先生が「屋久島の人がね、〝北海道って自然がいっぱいあっていいなぁ。〟って言うんだよ。」って教えてくれました。そんなものなのかもしれません。大切なことは、外の人から教えられるものなのでしょうね。

こうした現象が示すように、世の中の価値観が少しずつ変わろうとしていることは確かです。中でも若い人、時代の動きに敏感な人がまず気づき始めているように思います。特に東日本大震災以降、多くの人が新しい社会への転換が

への転換が必要だと感じています。エネルギーや自然環境のこと、また経済のことや人と人との絆の大切さなど、今ほどこれからの生き方を深く問い直されている時はありません。しかしこの国の現状は、今の政治などを見ていて感じるように、新たな方向性を見いだせず、混迷していると言わざるを得ないのではないでしょうか。

地域創成の鍵

私は、地域創成の鍵は「農を基盤として、地域の人、モノ、金を活かして様々な生業を生み出し、互いに繋がって人々の暮らしを支えあっていく」ことにあると思います。その結果、経済は〝地域循環型〟への移行が可能となるでしょう。ではなぜ、「農」なのか。まず一番に挙げられるのは、今、地球規模での環境問題、エネルギーのことなどを考えた時、「農業」ほど自然と人との関係性を持続的に維持することができる産業は、他にないと思うからです。また、地域において、これからのグローバル経済に立ち向かえるのも、「農」関連の産業ではないかと感じています。

このような状況を考えたとき私は、この南あわじ市こそ、地域創成ができる可能性を持っていると感じています。なぜならここ南あわじ市は、農業においては「淡路島玉ねぎ」が代表するように全国「淡路島玉ねぎ」が代表するように全国でも有数の大生産地です。高齢化が進んでいるとはいえ、約5万人のまちで認定農業者数が約800名もいます。このまちは、世の中が、工業化が進み高度経済成長を謳歌している中で、御食国（みけつくに）の時代からずっと引き継がれてきた「農業」の技術を開発し、一生懸命工夫しながら今もなお「農業」を主要産業としてきました。これからは、生産地としての強みを活かして、農を軸とした地域に適したさまざまな生業づくり、つまり第二次から三次産業による新たな仕事を創出し、ネットワーク化することで、この南あわじ市は、「周回遅れのトップランナー」になれる可能性があると私は思っています。

大学は新しい風…

そのためにまず必要な要因の一つは、こうした現状を明確に認識し、今ぼんやりと見え始めているこの国の〝未来〟を、切り開いていくリーダーを育成することではないでしょうか。特に農村地域の創成を担う優秀な人材を育てることです。

農業後継者の若手たちと中田市長（中央）の和やかな懇談、木田氏（左）

そんな折、昨年度、「南あわじ市活性化委員会」からの提案で地域創成のための農学を教育・研究する高等教育機関の設置を要望しました。この時代としては大変幸運なことに、その意を汲んで「順正学園」が進出の意向を示してくれ、その誘致が実現の方向で動き出しました。

このことは、淡路島民にとって、長年の夢が叶った嬉しいニュースです。まさしく「新しい風」がこのまちに吹いてきたといえるでしょう。

先日、イタリアのボローニャ大学が、市民の力で創設されたヒューマニズムあふれる大学だとお聞きし、そのプロセスが今回の取り組みとよく似ていると思いました。高校の閉校跡地をどう活用すべきか、この街に足りないものがあるとすれば、それは何なのか、私たち住民代表で審議する「南あわじ市活性化委員会」のメンバーで何度も話し合いました。その答えは「教育」すなわち担い手育成と研究機関の誘致でした。当初は寺子屋や、塾…などを想定していましたが、まさか大学誘致が実現するとは思ってもみませんでした。今回の地域からのいろいろな申し出に対して、順正学園の理事長さんが、「地域のみなさんの夢を共有したい」とおっしゃって下さったのが本当にうれしかったです。

こうして実現した吉備国際大学の「地域創成農学部」という名前には、私たち住民の熱い思いが込められています。

吉備国際大学・地域創成農学部のチラシ

そしてこの大学創設に一役を担ってくれたのが、この「M・O・H通信」でお馴染みの内藤正明先生でした。先生の長年の主張であった「農業再生による持続可能な地域社会の創成」という理念を踏まえて、今回の大学の構想は動き出しています。それは、次の時代に向けた新しい社会の創造です。そして、この国にとってのこれからの農業をどう位置づけ、疲弊しつつある地域の可能性をどう引き出していくか、南あわじ市のような農業を基盤とした地域が、これからどう生きていくのかを、真っ向から、取り組むことを理念に掲げています。今後この大学と、私たち住民や行政、企業等が連携を取りながら、さまざまな地域課題に取り組み、これからの農村地域の方向性を

❶ 玉ねぎほ低温貯蔵で品質を保持　❷ うずしお　❸ 国生み伝説を持つ、おのころ神社の大鳥居　❹鳴門海峡で育ったふぐが特産品　❺ 畑で　❻ 伝統芸能の人形浄瑠璃を学生も継承

見出していきたいと夢を膨らませているところです。

南あわじ市キャンパス構想

この「農学部」の教育方針の中では、しっかりと基礎学問を大学で学びながら、学生を地域の現場で育てていく「コープ教育」が重視されています。それは、大生産地であるこのまちだからこそできることです。つまり南あわじ市そのものが、キャンパスである…ということです。この大学の方針に呼応して、今まさに「南あわじ市キャンパス構想」を市民が主体となって、作成しているところです。

❼ 薫陶の郷店主池上邦彦氏（左）みさえ氏（右）「脱サラし、田舎暮らしを楽しみに宝塚からきました。淡路島は情があって暮らしやすいです。お客様にゆっくりしていただいています」　❽ 蕎麦ランチ1,500円　❾ 池上夫婦がよみがえらせた庄屋の古民家。高台に建つ佇まいは美しい　❿ あわじのたこと大根ランチ980円　⓫ 体ヨロコブごちそうカフェ「菜と根（きとね）」

そして、このまちの経済をどう立て直していくか、これからの「農業」の可能性は…という取り組みについては、吉備国際大学地域創成農学部（来年４月開設予定）の開校に先駆けて、今、地域住民が主体となって、この街に「産・官・学・民、さらに金融機関」も関わった連携センターを立ち上げるべく、準備を進めているところです。こうした中で、若者が企業する新たな生業の創出や、６次産業化の推進、新商品の開発、あるいは気候変動に対応した農業技術の研究など、このまちの将来像を研究者と地元、外部の様々な機関と組んで、考えていけたらと思っています。

「農」の可能性…

さてここで、「農」の可能性について少し触れておきたいと思います。

近年、世界的には食糧難時代が来るといわれています。ところが日本は、そうした将来に備えるような気配が感じられません。もし、このまま農業の後継者が育たなければこの国はどうなることでしょうか。想像しただけでも不安になります。さらに、安心安全な食を求める消費者が増えていることも確かです。またエネルギーのことを考えると、自分の住んでいるところから遠くで作られたものを食べるよりも、できるだけ近くで作られたものを食べること（地産地消）が求められています。こうして現状を見るだけでも、必ず「農業」が主役になる日がくるといえるでしょう。

また、現代病といわれるさまざまな病気の原因は、食につながることがほとんどです。

病気の予防、健康増進、癒しなどの「農」の可能性をもとめた「農医連携論」を展開している大学もあります。「命」そのものにつながる「農」はあらゆる面で、今の時代の課題を解決する大切な鍵になると思っています。

さらに近代化、工業化の進展の中で希薄になってきた「人と人との絆」をどう取り戻していくのか、という問題も、農耕社会をもう一度見直す中にそのヒントが隠されていると私は思っています。もともと農耕社会は、共同作業を軸に仕事が組まれています。淡路島でも「田主（たず）」と呼ばれる水利権などは、昔から村のルールや規範作りのもとになっています。そして淡路島民がずっと大切に守り育ててきたものに祭りや文化、伝統芸能がありますが、これらはほとんどが農耕民族のさまざまな祈りや、ルール作りなどから生まれたものです。こうした島の歴史や文化の中にもまた社会のあり様が示されているのではないでしょうか。新たな大学では、地域住民の要望を受け止めて地域文化や芸能を教授する科目が設けられているのも、そのことが背景にあるからです。「農」と「農系社会」の持つ幅広い力が、新たな教育力となり、それがまた「地域創成」の鍵となる相乗効果をぜひ期待したいものです。

もう時代は待ってはくれません。やるべきかどうかを議論するのではなく、やらざるを得ないところまで来ています。「地域創成」それは、私たちみんなの新たな可能性への挑戦なのです。

みんなが幸せな世の中を…

木田 薫

●きだ かおる＝保育所勤務から退職後、図書館、保育所・幼稚園・小学校・高校等で、読み聞かせボランティア、あるいは講師として活動を継続。1995年に結成した人形劇団「わややん」では代表を務め、これまで島内外で200回以上の公演を行う。また、くましろふれあい広場の活動として、2年半前から地域の課題であるシカ等の農作物などへの獣害対策に、地域住民、多数の研究者達と共に取り組み、成果を上げる。そのことがきっかけとなり、淡路島内の環境問題にも目を向け、2010年春、「環境フォーラムin淡路島」を自ら実行委員長として企画、開催する。現在、南あわじ市活性化委員会委員長、南あわじ市社会教育委員長、淡路地域社会教育委員会協議会副委員長等を兼任。

〈インターナショナルメッセージ―独逸〉

自動車王国で自動車に乗らない生活

原　修子

ベンツ、BMW、ポルシェ、フォルクスワーゲン、そしてAudiやオペル。自動車好きの人にとって、ドイツはまさに自動車王国と言えるのかもしれない。その国で今私がやっている事は、出来る限り、必要がない限り自動車を使わない生活。

今住んでいる所は街の中心からは約4キロ離れた、道路を超えれば隣の市という住宅地域で、バス停までは徒歩5分、路面電車の停留所までは10分程、3分歩けば大型スーパー、10分でバイオ製品のスーパー、その上ディスカウントショップもすぐ近くにあるという大変便利なところである。しかしそれでも私は自動車を使っていた。便利だからという理由で。免許を取って以来常に車のある生活を送って来た私は、ほんの僅かな距離にも車という自動車依存症人間であった。

「あら、ここにはこんな猫ちゃんがいるのね。今日は道路を横切ってお向かいさんへご挨拶？　へー、ここのお宅は犬を二匹飼っているのだ。昨日このお宅、庭で兎さん達が遊んでいたけれど、今日は姿が見えないな？　あら、朝顔の鉢植え。あれっ、こんなところに空き地があったかしら？」

歩き始めてからの発見はいろいろと多い。これまで運転席からしか見ていなかった風景がより身近なものになってくる。

バスの中で、路面電車の中で、乗り合わせた人との会話。そしてこれまでには無かった視覚から眺める街並。大げさに言えば全てが驚き、発見である。

これからも、出来る限り歩こうと思っているが、但し冬になり気温が零下となると、寒さ苦手の私は自動車族に逆戻りしているかも…。

●はら　しゅうこ＝徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

⑥寄稿〈未来創成「私たちが変える」〉

鈴鹿カルチャーステーションとアズワンコミュニティ

—— 話し合いをベースにした縁側づくり

片山 弘子
鈴鹿カルチャーステーション（SCS）理事／鈴鹿市

❶SCS外観
❷SCS編み物カフェ
❸環境啓発セミナーとワールドカフェ
❹SCSてっらこやー人ー人の学びの個性
❺SCS子供文化祭
❻SCSわらべうたの会　凧凧上がれ
❼SCS太鼓チームは地域で人気
❽SCS街のお茶会はリラックスして
❾SCS図書ルームの子どもたち

弊誌30号の近畿圏アクティブウーマン座談会にもう一人、三重県鈴鹿市から参加した片山弘子さん。鈴鹿カルチャーステーションを開設し2年が経過した。まちに縁側を作ろうという、新たな試みが鈴鹿のまちに広がっている。

おしゃれでおもしろそう

鈴鹿カルチャーステーションをスタートして満二年がたちました。きっかけは、もともと鈴鹿市平田地区にはコミュニティ活動をしている人たちが多く、「いつでも立ち寄れる落ち着いた空間が欲しい」という要望があったことと、もう一つはNPO法人循環共生社会システム研究所（KIESS：代表 内藤正明先生）で学んできた循環共生のまちづくりを、実際にやってみようという仲間ができたことです。

まず2009年11月にKIESSと共催で公開シンポジウム「足元からつくろう循環共生社会」を開き、放置されていた廃テナントを再生して街の文化発信基地として育てるという、私たちの趣旨と構想を発表しました。「まちの縁側、学び舎、エコステーション」を目標に、市民が主役になれて、ちょっとおしゃれで小回りがきく場所——私たちもその仕事で生計を立てられるようなコミュニティビジネスを夢に、スタートメンバーで最大限工夫して資金を集めました。おかげさまで寄付があったり知人の応援があったり、中でも特に「なんとなく面白そうなので」と口コミで来訪者や企画参加者が広がったりしたのも大きなことでした。

夢を縦糸に人の輪を横糸に

私たち設立メンバーの得意技や持ち味を発揮しやすいこと。その上で共通の夢を縦糸に、横糸として人の輪づくりやモノの循環をどう仕掛けていくか、地域の皆さんの潜在的な夢に繋がるような物語として、どう織り上げるかをずいぶん話し合いました。話し合った内容より、むしろやりとりそれ自体が勉強でした。お互いにまるで初めて会う人のように出会い直していく感じや、なぜそんなことを言うのだろうと批判がましく思ったり、逆にムキに言い張る自分の状態に気づいたりでした。やりたい、やろうという熱意だけでは実現しないなあとしみじみと思い、NPO法人サイエンズ研究所（代表 小野雅司氏）の協力で、話し合いの出来る状態になっていこうと、それぞれが学んでいるところです。

まちづくりといっても、実際は日々のさまざまな形の話し合いが基本です。自分も人もどちらも人として尊重されるのなら、どう共に生きていくか、その道を一緒に見つけること、その過程自体が鍵だと気がつくようになりました。せっかく一緒に始めた者同士、ルールや互いの道徳観で責めたり縛りあうのではなく、逆に自分の心の解放をしつつ協力する——訪れる人たちもそんな空気をキャッチするだろう。そんな中から、まずはエントランスからギャラリーホール、コミュニティカフェ、茶室、美容室、学び舎スペース、貸事務所や会議室を施設として用意し2010年7月3日一般社団法人・鈴鹿カルチャーステーション（SCS：代表 坂井和貴氏）としてオープンしました。以来、0歳児から楽しめるバイオリンコンサートやフランス映画の会、環境講演会などのイベントと、各種文化教室、学習塾、子供向け自然体験企画、サイエンスカフェなどを展開しながら活動を続けています。

街のはたけ公園と未来の里山プロジェクトの開始

開業と同時に、私たちの趣旨に賛同した地元密着型のショッピングセンターから、いきなり5000坪の空き地を提供されました。そこはSCS（前出）から歩いて5分で、買い物帰りに子供からシニアまで、誰でもちょっと土いじりや収穫を楽しめそうな場所です。まちの文化と農の文化の接点となる「街のはたけ公園」にしよう！と提案して、耕作放棄地再生プロジェクトをスタートしました。また、2010年11月に鈴鹿市の重要生態系地域徳居町に、自治会の同意と協力で里山を借りることができました。街と里山をつなぐ事業として山村再生モデル事業に選ばれたことで、普段着で入れる里山に行こう！翌2011年度から毎月里山の整備や炭焼き、シイタケ栽培、柴刈り体験など子供からシニアまで里山の暮らしの体験会が開催できました。小学生では2011年度1年間で鈴鹿市内の小学校30校中21校から参加が見られました。

同時にサイエンスカフェも年間通して開催を続け、第一線の科学者と循環共生の街づくりについて膝を交えて談義できる機会をつくりました。その中で、退職前後のシニア世代で新しい生きがいを求めている人が多いことが分かり、NPO法人KIESS（前出）の協力で、生きがい健康づくりを目的とした「地域再生コーディネーター養成講座」を開催しました。その結果、まちづくりに生きがいを感じるリーダー的人材が2年間で15人近く生まれ、学んだことを基本に生ごみダンボールコンポスト作りや落ち葉堆肥づくり、野菜栽培、里山整備など、地域の小さな循環につながるモデル的な活動を思い思いに描いて、自発的に行動を始めました。

このあたりの協力関係を「アズワンコミュニティ」と呼んで説明をしやすくしました。何人か、自宅を開放してゲストハウスやコミュニティ食堂を始める人が出たので、協力して見学者を受け入れやすくなりました。昨年の震災の影響もあって、関東や東北、滋賀県からもコミュニティ作りに関心のあるグループや個人の見学が増えました。お隣の韓国ではコミュ

生ゴミダンボールコンポストを通してつながる

「街のはたけ公園」 自分たちで植えた小松菜収穫

ニティ作りに国民的に取り組む動きがあるそうですが、韓国から研究者や運動家レベルの見学が数件続いた中で、ある私立高校から交換留学の要請があり、昨年度から民間同士の交換留学制度がスタートしたところです。続いて今年5月に、ドイツからエクハルトハーン博士を招いて、「コミュニティ単位のエネルギー事情を学ぶ」セミナーを開催したことをきっかけに、20代青年とシニアグループの混合チームで「エネルギー地域自給を考える歓談会」が誕生し、コミュニティで取り組めることを見出そうと勉強会が始まりました。鈴鹿市の要請で環境展に出展したり、新しい公共の円卓会議に呼ばれたりして、公の場で経験を報告するようになってきました。

くるくる市場と地域通貨の試み

この2年間の実績をベースにして、元気なシニアたちが満足できるような舞台をもっと提供するべく、今年度は「街のはたけ公園」を起点に周辺の4町から徒歩や自転車で行き来ができる範囲で、人やモノが交流・循環できる「くるくる市場」をつくろうとしています。まず、シニア有志によるベジタブルコミュニケーションクラブ（通称ベジコミ）ですが、参加したい人は一畝からでも都合や力に応じて「はたけ公園」で四季折々の野菜を生産する。出来た野菜は地域通貨も織り込んで流通する仕組みをつくる。子ども畑クラブも立ち上げて、放課後に野菜作りに関わりながら、ベジコミのシニア達や農場の若者たちと交流する。同時に、生ゴミダンボールコンポストを普及させ、生ゴミを焼却場に運んで燃やす不合理を解消し、出来たコンポストは「はたけ公園」内の堆肥置き場に集まるようにして、土作りの元とする。各町内会の清掃作業で集められる落ち葉も「はたけ公園」の堆肥場に運ぶことを推進する。「エネルギー地域自給歓談会」の勉強成果に沿って、弁当屋や食品業から出る廃油の循環を進めるなど、小さな範囲内での物質循環が実現しました。モノの循環を繋げていく人と人との交流も生みました。「くるくる市場」を繁盛させる取り組みとして収穫祭や成果発表会などを織り込んで、その地域に「居る人」と「有るモノ」を基調にした、

徳井町の里山で遊ぶ

ベジタブルコミュニティクラブ（ベジコミ）

お金だけに依存しない新しいつながりを生み出していきます。

課題は遊び心で楽しむ

文化活動が主体の上に公益性が基本なので、収益は大きく見込めませんが、里山整備や子供の体験活動、エネルギー勉強会など、各々活動助成を受けることができたので、事業としては継続可能になりました。しかし私たちの生計を立てるには至らないので経営の工夫が必要です。また今年度からは自治会との協力が不可欠です。里山は40年以上放置されて持ち主さえ無関心です。私たちもうまくいき始めてつい対話を怠った途端に、反発される経験もしました。

また自治会活動で地域に関わりたくなくなることもありがちのようで、一斉美化に誰が参加したかしないか陰口が出たり、出不足料の数千円を納めたり、急用で参加できなかった人に対して文句が出るなど、たとえうわべが綺麗になっても、むしろ人の和が壊れる方向に働く例も多いようです。逆に、退職後に誰にも頼まれないのに美化を毎日やっている人もあり、その人との出会いで「自治会の役員に掛け合ってくるよ」と、落ち葉を「くるくる市場」に集められる方向が出ました。

そういう中で、私たちがいいことをしている顔で地域の人の心に無関心だったり、逆に監視しあうような慣行に従うのでは、「もっと絆を」と叫んでも、すればするほど人の心は離れていくでしょう。

地域に小さなモノの環や人の和を生み出すには、各家庭での取り組みだけではなくて、特段の関心がなくても誰でもコミュニティづくりに参加しやすくなるような遊び心、気楽さや簡単さに惹かれて、やりたくなった人から参加し、だんだん周りに広がって、全体に意識が高まっていくような仕掛けにしたいです。

今は価値が無いと思われている目の前に有るモノが生かせたら、次の豊かさが生まれて来る。目の前に居る一人の人が本当に生かされたら、その人の溢れる楽しさが次々と周囲の人たちに伝播して行く――一つのモノ、一人の人が本当に大事にされる気風が街づくりのエネルギーになっていくのではないでしょうか。そんなキッカケづくりとなるよう願って、頭でなく心で、3年目は隣近所や地域コミュニティの人と粘り強く対話を続けてみたいと思っています。

科学と心で幸せなまちづくり

片山弘子

●かたやま ひろこ＝NPO法人KIESS設立メンバー。鈴鹿市環境審議委員。科学と文化が一体となった街の健康づくりを通して、「暮らし」の中に、人と人、人と自然の「新しい繋がり方」を根付かせる、市民が主役の社会変革を模索中。

★「普段着で探訪デー」一泊二日。月二回開催。「鈴鹿カルチャーステーション」の運営と共に、コミュニティ作りの日常をありのまま紹介する。
公式サイト
http://as-one.main.jp/ac/video.html
「鈴鹿カルチャーステーションを起点にしたコミュニティ作り」（動画）

⑦寄稿
〈未来創成「私たちが変える」〉

琵琶湖を守る市民活動のデパート、野洲

山・川・里・湖のつながり再生に向けて

佐藤 祐一
滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

家棟川の風景。家棟川の流域界と野洲市の市境が大きくオーバーラップしていることが行政・市民等の連携による活動の大きな鍵となっている。

1 何でもやっている、野洲

「最近川の濁りがとれへんのや。数年前やったらこのあたりは底まで透き通ってたのに。」

2010年、夏。私は野洲市を流れる家棟川で屋形船に乗りながら、この道50年の琵琶湖の漁師松沢松治さんから話を伺っていた。以前のことは分からないが、確かに今の家棟川は濁りが強く、きれいとは言えない。一方で私は、琵琶湖やその流入河川の水質について研究していることもあり、家棟川の水質が1980年代以降、有機物、窒素、リンともに濃度が減少傾向にあることも知っていた。データ上はきれいになっている、でも地元の人は汚くなったと言う。この違いは何だろうか?そこにこそ、行政や専門家が進める環境保全の取り組みと、市民が求める環境とのギャップの本質があるのではないだろうか?そう思い、私はこの家棟川と野洲市にとことん関わってみようと決意した。

あるときは一市民として、またあるときは研究者として関わるうち、驚くべきことに気がついた。それは、琵琶湖やその流域の環境を保全・再生する活動として思い当たるもののほとんどが、すでに野洲市や家棟川流域で取り組まれているということだ。しかも、その多くが市民主導で実施されている。さながら「琵琶湖を守る市民活動のデパート」と言ってもよいだろう。本稿では、野洲市がそこまでパワーアップしてきた経緯と、また「山・川・里・湖のつながりの 再生」をテーマに取り組まれている活動のいくつかについて、私の知る範囲でご紹介したい。

2 市民参加型の計画づくりから始まった

野洲市において環境保全活動が活発になった一番大きなきっかけは、2007年の野洲市環境基本計画の策定である。この計画の策定にあたり、2005年から2年間、公募を含む市民委員31人と行政委員8人が延べ33回の策定検討会議を重ねた。折しも、2004年に野洲町と中主町が合併されて野洲市ができたばかりであり、会議開催当初は議論がすれ違うこともあったと言う。しかし、参加者の粘り強い協議の結果、24項目に上るリーディングプロジェクトが中心に据えられ、市民自らが実行していく計画ができあがった。

このプロジェクトの1つに、「『おらが川』人が親しめるきれいな川づくり」というものがある。野洲の子どもたちや野洲内外の市民を船に乗せて家棟川流域を案内し、「おらが川自慢大会」を開催して仲間づくりを拡大した後、自然豊かな川の環境整備を行うことが目標とされている。実際、これらはすでにNPO法人家棟川流域観光船の設立、野洲市水フォーラムの開催といった形で実現されてきており、計画が絵に描いた餅ではなく市民主導で実行されてきていることを示している。

2011年に策定された滋賀県の「マザーレイク21計画（琵琶湖総合保全整備計画）第2期改定版」もまた、市民参加に基づく議論が土台となってつくられたものである。琵琶湖とその流域の将来像について市民から意見を吸い上げるため、「琵琶湖流域管理シナリオ研究会」を設置し、多様な分野の専門家10名と市民15名が連携して延べ22回のワークショップや研究会を実施してきた（その後開催された滋賀県環境審議会も含め、野洲市環境基本計画の策定に関わった複数のメンバーが参画した）。そこで出されたキーワードが「山・川・里・湖のつながり」であり、その再生が計画の重点プロジェクトとして位置づけられた。

このように、市民参加により野洲市ならびに滋賀県の計画がつくられたからこそ、市民は主体的に活動を進め、また行政もそれをバックアップするという体制ができあがっている。このことが、野洲市で様々な取り組みが発展した最も大きな理由である。

3 多様なセクターがつながり、山・川・里・湖もつながる取り組み

計画策定を契機として、野洲市ではどんな活動が実施されてきたのか。「山・川・里・湖のつながりの再生」をテーマとして取り組まれている活動のうち、いくつか代表的なものを紹介する。

（1）山

漁師の松沢さんをはじめ、野洲市で環境保全に取り組むメンバーが生産森林組合と交流する機会があったという。そこで森林組合の方がおっしゃったのは、「琵琶湖が大切というけれど、琵琶湖の水は山から来ている。今、山も大変なんや」ということであり、そこから始まったのが「漁民の森づくり」である。漁師、森林組合、山で活動する市民、行政などが参画し、野洲市大篠原の山中にある裸地に植樹を進めている。これまで植樹や枝打ちを計7回、延べ1200人以上が

参加し、山と湖のつながりを理解する貴重な機会となっている。

(2) 川

NPO法人家棟川流域観光船は、家棟川の状況をより広く知ってもらい、ゴミがなく自然環境に恵まれた家棟川にすることを目指して設立された団体である。本法人は家棟川に屋形船を浮かべ、地元の老人たちの働く場として昔の経験を活かして船頭（櫓・竹竿）になってもらい、乗客には船上より家棟川の実態を見てもらう活動を実施している。地元の自治会や学校をはじめ、県外からも乗客があり、これまで延べ3000人以上が乗船している。家棟川の景観や湖魚食を楽しんでもらうとともに、定期的に川のゴミ掃除も手がけ、周辺の自治体などに川をきれいにしようと呼びかけている。NPO代表の北出肇さんによれば、そのお陰で年々不法投棄は減少してきていると言う。

また家棟川では2011年より、身近な環境の良さや課題を改めて見直し、失われつつある暮らしと水辺の「つながり」を取り戻すため、市民参加による水と生きものの調査が実施されている。

これは「家棟川生態回廊再生調査」と呼ばれ、市民、企業、行政、専門家が延べ150人以上参加する取り組みになっている。私が調査場所・方法の提案や取りまとめを行っている経緯もあり、少し詳細にご紹介したい。

市民参加型の環境調査は全国様々な地域で実施されているが、家棟川生態回廊再生調査の最大の特徴は、市民だけでなく、専門家、行政（野洲市・滋賀県）がガッチリとタッグを組んで調査を進めていることにある。現状を知って終わりというのではなく、市民は現場の知識や投網の技を活かして定期的な調査と記録を実施し、専門家は調査結果の分析や解析、ならびに改善策の提案を行い、行政は調査データの集約や対策検討にあたっての各種調整や協力を行うというように、それぞれの得意技を活用して実際の環境改善に結びつけていこうというものである。ただ、実際は役割分担をそこまで明確に決めているわけではない。市民も改善策は検討するし、専門家や

家棟川生態回廊再生調査の風景(魚の体長と重量を計測し、調査票に記入する)

屋形船に乗って家棟川の自然と空を満喫

行政も投網を投げる。そのように役割を一部オーバーラップさせながら調査を協働して進めることで、お互いが学び合い、楽しみながら調査を進められている。最近では企業もCSR活動の一環として参加したり、周辺自治会の人々や子どもの環境学習の場としても活用されていたりして、参加者の広がりを見せている。

調査の結果、家棟川には少なくとも19種類の在来魚類がいることが確認された。これは湖北や湖西のきれいな河川に全く劣らない種類数であり、川に住む魚の多様さに多くの参加者が喜び、川を見直す契機となっている。水質や人工構造物、底泥の調査からは、ビワマスの遡上拡大に向けた具体的な取り組みの方向性も見えつつある。多様なセクター参加によるメリットを最大限活かして、より多くの人たちと現実的かつ実効的な改善策を考えていきたい。

（3）里

家棟川は流域の約半分を水田が占める。それだけ農業が地域の重要な産業であり、かつ水環境保全の観点からも農業における取り組みが重要となる。野洲市内では現在、化学肥料や農薬の使用を半分にする「環境こだわり農業」の他、複数の地域が「魚のゆりかご水田」に取り組んでいる。

「魚のゆりかご水田」とは、かつてあった水田と琵琶湖のつながりを取り戻し、水田をコイやフナ、ナマズなど在来魚の産卵・繁殖の場として活用しようという取り組みである。排水路に魚道を設置したり、一定区域の水田全体で水管理を合わせなければならなかったりと、取り組む側にとって負担は少なくないが、そうして収穫されたお米が安全・安心な「魚のゆりかご水田米」として付加価値をもって流通すれば、経済的にもメリットが出てくる。野洲市では、地域の人の発案で魚道に地元の間伐材を利用したり、ゆりかご水田における田植え、観察会、稲刈りといったイベントを開催して積極的な普及啓発を図ったりといった工夫が凝らされている。その結果魚のゆりかご水田は、「魚の産卵・繁殖の場」としてだけではなく、「人が集まり文化や環境について対話・継承する場」としても重要な取り組みとなっている。

魚のゆりかご水田観察会の様子。例年100名を超える多くの参加者でにぎわう。

（4）湖

家棟川の河口部にあたるあやめ浜では、琵琶湖の保全のため様々な活動が実施されている。例えば湖岸堤の設置に伴い失われたヨシ帯を復活させ、在来魚の産卵・生息場所等を再生しようという取り組みが実施されている。いわゆる「ヨシの植栽」は滋賀県内の様々な地域

で実践されているが、ここでの取り組みの際だった点は、①地元自治会、少年野球チーム、企業、行政など多様な主体が参画していること、②植栽するヨシ苗づくりを地元の小学校が担っていること、である。特に、学校の教育プログラムにこうした活動が取り込まれている事例は全国的に見ても多くはない。

また地元の漁業組合の努力が実り、浜ではシジミが復活してきている。シジミつかみやシジミの味噌汁の試食などを行う「あやめ浜まつり」も夏期に開催されており、毎年200名以上が参加する大きなイベントになっている。

浜にヨシを植える

4 まじめに、楽しく

野洲市と家棟川流域では山・川・里・湖で様々な取り組みが実施されており、それぞれにキーパーソンがいる。またそのキーパーソンが重複したり、横につながったりしているからこそ、山・川・里・湖のつながりが実現されている。山・川・里・湖のつながりとは、結局のところそこに関わる人のつながりではないかと私は感じている。

またそのつながりをより強固なものにしているのが、「食」である。野洲市にはビワマス、ウナギ、氷魚などめったに食べられない湖魚食をはじめ、ふなずしやコアユの甘露煮など湖魚を使った伝統食、魚のゆりかご水田米、地元でとれた野菜などの食材が豊かにある。これまでに述べた様々な取り組みの終了後には地産地消の食事がセットになっていることも多く、参加するモチベーションの一つになっている。五感で感じられるこの地の豊かさを、ときにまじめに、ときに楽しく語り合えることが何よりも嬉しい。

現在、野洲市環境基本計画の策定から5年が経過し、その中間見直しが行われている。これほどまでに活発な活動の何を見直すのかと言いたいところだが、最大の課題は「どうやってさらに活動の裾野を広げていくか」だと言う。私も微力ながら尽力していきたいと考えている。

地域に学ぶ

佐藤祐一

●さとう ゆういち＝1978年大阪生まれ。京都大学工学研究科博士後期課程を中退し、建設コンサルタント会社勤務を経て、現在滋賀県琵琶湖環境科学研究センターの研究員。専門は環境動態シミュレーション（水文・水質、生態系、放射性物質等）だが、学生時代から市民参画による計画・代替案づくりなどにも関わる。マザーレイク21計画（琵琶湖総合保全整備計画）を市民参画でつくるプロジェクトの事務局を務め、そこでの経験と人脈がその後の研究の方向性を大きく決定づけている。

⑧寄稿〈未来創成「私たちが変える」〉

親子をつなぐ学びのスペース リレイト

中桐 万里子
国際二宮尊徳思想学会 常務理事

未来の創成に教育は欠かすことができない。教育の力や可能性は、学校だけがもっているわけではない。家族や親子に焦点を当てた子育て支援の場がある。「学びのリレイト」だ。主宰は二宮金次郎の子孫にあたる中桐万里子氏。可能性が見えそうだ。

学校×家族×親子

「臨床教育」。聞き慣れないかもしれませんが、この領域がわたしの専門になります。シンプルに言えば学校の先生方の相談役であり、そこでのコンサルテーション活動を通じて「教育」とか「子育て」といったことを考えてゆこうとする立場です。たとえば、クラスのある子どもが問題を抱えているとして、この子ども自身に出会い、改善や治療に向かおうとするのはカウンセリング（臨床心理）や医療です。カウンセラーと子ども、医者と子ども、のように専門家が素人（患者）に出会うという構造を基本にしています。それに対して、問題を持っている当人ではなく、その子どもにかかわる教師というプロと、そして臨床教育のプロが、ともに専門家同士として出会おうとするのが臨床教育です。この子どもをどう理解し、どうかかわるのがいいのか、この子どもを含めた学級運営とは…。そうしたことを一緒に相談しましょうという具合です。ちょうど、会社運営をする社長と経営コンサルタントが相談をする構造と

似ています。あくまで「治療」ではなく「教育」に向かう方途を模索するのです。

わたしは大学院時代に、こうした活動のなかで多くの学校現場の先生方と出会い、相談を重ねながら、次第に感じるようになりました。「学校だけじゃなく、家族や親子という場所にも、まだまだ発掘できる可能性や潜在力があるんじゃないか」と。その想いをひとつのきっかけとして、大学院卒業後に、こうしたテーマに取り組むための子育て支援機関として立ち上げたのが「親子をつなぐ学びのスペース　リレイト」です。

リレイトって…？

なにげない親子の日常、あたりまえのように過ごす家族の暮らし、あるいは、子どもたちをめぐる「問題」に悩む日々。実はこのなかにこそ、子どもたちの「育ち」と深くかかわる可能性がねむっていて、それらを掘り起こすことで、子どもたちはもちろん、その子を育てる大人たちもまた子育てライフを活き活きと楽しめるのではないか…。それがリレイトの想いです。

リレイトには親子で一緒に来室していただき、その後、各部屋に別れてレッスンを受けていただきます。それぞれのプログラムはすべてマンツーマンでおこないますので、一方の部屋では親とスタッフ、別室では子どもとスタッフが、それぞれのレッスンに取り組むことになります。そしてレッスン後にはふたたび一緒になり、家への道のりをともにしていただく、といった構造になります。家族といえどもそれぞれが異なる世界を生きていること、しかしそうした異なる人生を歩む者たちがともに一つの家族としてかかわり合ってゆくこと、そのどちらをも尊重し、そこに敬意を向ける…。少し大げさかも知れませんが、リレイトをめぐるカタチは、そんな大きなイメージも重ねもつスタイルだったりします。では、一体なにをレッスンと呼んでいるのか。さらに具体的なお話に移りたいと思います。

日記で対話

親と子、どちらのレッスンも「日記」をひとつの手がかりとした「対話」というカタチになっています（なお、今回詳しくお話しできませんが、これこそが臨床教育という方法であり、わたしの場合はこれを自身の先祖の一人でもある二宮金次郎の実践方法を手がかりとして構想しています）。子どもたちには、あるテーマ（たとえば「勇気」「宝物」「友だち」など）からの連想で小さな物語を書いてもらう。「物語日記」か、毎日のできごとを一行で書く「一行日記」を創ってもらい、基本的にはこれをめぐってスタッフとの「やりとり」をします。この作業を通して、子どもたちが自分にとってなにが大切で、なにが腹が立つことで、なにを楽しいと感じ、なにを譲れないと思っているのか…などを考えるきっかけにして欲しいと考えています。物語日記はこの点を比較的顕著にしてくれますが、一行日記も負けてはいません。たとえば「今日はサッカーをした」と「今日は友だちと遊んだ」とでは、サッカーという遊びが楽しかったのか、友だちといたことが大事だったのか、と言った具合に書いた子どものキャラクターも大切にしているものも違う可能性があるのです。もちろんなかには、おしゃべりをしたり、絵を描いたり、粘土づくりをしたり、フィギュア遊びをしたりする

ことを、日記を書くことの代わりにする子どももいます。それぞれ表現のカタチはどのようなものであってもかまわないと考えています。大切なことは、日記をはじめそれら表現活動のなかで、あらためて自身の日常に目をむけ、「自分」を確認し、手応えをもって「自分づくり」をしてゆくことだと思っているからです。

よくみて伝える

また、親のレッスンは毎回の宿題である「子ども日記」を中心としたコンサルテーションとなります。各回さまざまなテーマ（たとえば「子どもの口癖」「夢中になる遊び」「学校から帰って最初に話す内容」など）を設定したうえで、そのテーマをめぐって子どもたちを観察し、書いてきていただくのが「子ども日記」です。たぶんどの家庭でも、子育てをめぐる毎日はほんとうに忙しく、めまぐるしく、次から次へとめくるめくやるべきことに追われるような日々ではないでしょうか。わざわざゆっくりと腰を据えて、わが子を「よくみる」ことは意外にも少ないのではないかと思うのです。子どもをよくみること、そしてその様子を記述すること。実はこの作業だけでも、子どもの新たなる一面を発見できることは多いものです。さらにレッスンでは、スタッフとの対話（コンサルテーション）を加えるため、まったく別の角度からの見立て方に出会う可能性が開かれるのです。

でも…

たとえば、素直でおとなしかったわが子が急に反抗期に入ったと感じ、困惑する思いを抱いているとき、「近ごろやたらに『でも…』と反抗する。これを言われるとついつい苛立ちや不安をおぼえる」といった日記が書かれるとします。親は、このように日常のできごとや思いをあらためて言語化するなかで、子どもや自分を少し冷静にみる体験をします。すると「『でも…』なんてかつて自分もよく使った言葉だし、そんなに心配するほどのことじゃないのかなぁ」という、新しい感覚が生まれるかもしれません。さらに、スタッフとの対話のなかで「『でも…』を交わせる親子関係って健全かもしれないですね。親が子どもを抑圧して封印していたら、子どもはちゃんと反抗したり、自由に自分の意見を言えたりはしませんから。それにこの子のキャラクターからしたら、『でも…』と、自らの意見を語り出せるようになってきたのは、すごい成長というか、頼もしくなってきたな…とさえ感じますよね！」などという会話が出たとすれば、「問題」と感じていた「でも」に新しい景色が見えてくるのではないでしょうか。

答えは子どもの中に

リレイトでは、子どもたちには自分のなにげない毎日の一コマずつを、そして何より自分自身を、大切に愛おしむことから「自分づくり」に取り組んで欲しいと考えています。また親にも、この子を一番真剣に想い実際に育てているのは自分であり、この子の教育についての一番のプロは他のどんな専門家でもなくわたしなのだという、そんな自覚や自信や誇りをもって「子育て」に向かって欲しいと考えています。子どもをめぐる「問題」に悩み、それを解決しようとするとき、たしかにインターネットや本や雑誌や講演会にも、

たくさんのヒントがあるかもしれません。しかしこれらの中には、驚くほどに矛盾する見解だって示されています。「子どもが100点をとったときは、ご褒美を買ってあげた方がいい」という意見も、「そうしたことは絶対してはいけない」という意見も、世の中にはどちらもあるのです。さらに言えば、どんなに必死で探しても「いま、ここにいる、この子ども（わが子）について書いたり話したりしてくれているものはひとつもありません。目の前の子どもの「問題」に対応し、この子を育てようとするとき、なにをどうすべきなのか…。実のところ、その答えはどんな立派な専門家も持ち合わせていないと言えます。実際にその子どもと出会いながら、その子（の問題）を知ること、知ろうとすること。そこからはじめて「答え」に向かえるのではないかということです。一見、めんどうで効率の悪いやり方のようにみえるかもしれませんが、意外や意外、これがけっこう「急がば回れ」だったりします。わたしは、実はこのやり方こそ最短距離ではないかとさえ思っていますし、この謎解き（？）のプロセスにドキドキわくわくする楽しさや手応えがたしかにあることを実感しています。

私たちが変える未来創成

子どもにとっても親にとっても、それぞれにとっての平凡すぎるあたりまえの毎日には、ふと立ち止まって眺めるならばたくさんの喜びや感動やおもしろさが溢れています。道ばたの雑草のような小さな幸福かもしれませんが、そうしたものを発見するとき、自身の内側にキラキラとしたパワーが生まれることを感じるでしょう。悩みのない生活などありませんし、もしなかったとしても日々は忙しく、疲れ果てがちではないでしょうか。ねむっている活力を掘り起こし、日常に活き活きとした力をよみがえらせるための秘訣は、実はちょっぴり立ち止まって日々の景色をあらためて味わう作業にあるのではないかと思います。暮らしを再発見しながら、豊かな希望とともにまた新しい明日へと向かう…。リレイトという場所やここでの作業が、そんなことのお役に立てたら幸せだと、そんな想いとともに活動しています。

わたしの人生も、わたしの子育ても、きっとすべてを変えるのはわたしであり、まさに「私たちが変える！」のだと思います。自らの存在の尊さに目覚め、自らの目と感覚の大切さに気づき、日々を楽しみ愛おしむことができる人びとが集うこと。それが、一人ひとりが主役となった活力ある「未来創成」へとつながりゆく道ではないか…。そんなことを想いつつ、今回のお話を終わらせていただきます。

いま、ここ への 愛しきまなざしを

中桐万里子

●なかぎり　まりこ＝1974年生まれ。二宮金次郎より七代目の子孫。慶應義塾大学環境情報学部卒業。その後、京都大学大学院教育学研究科へ進み、博士号を取得し卒業。現在はリレイト代表、関西学院大学講師、国際二宮尊徳思想学会常務理事、二宮金次郎基金名誉顧問などをつとめる。

颯爽とサイクリング

寄稿

「ビワイチ」

豊田 一美
インターネットテレビ「ええラジオ」主宰

２０００年の12月にラジオの番組で初めて自転車びわ湖一周に挑戦した。

携帯電話でのレポートであったが、やってみるとラジオとびわ湖がぴったりと結びついて非常に面白く、恒例の番組となった。

一般的にびわ湖を一日で一周出来るかどうかという疑問から出てきた番組だったが、絵の無いラジオでも「今、どこどこを走ってます」と言えば滋賀県の

人なら時間軸と景色が結びついてイメージが出来上がる。

いつも湖西方面へと、時計回りに廻っていた。

当時は「ビワイチ」という言葉は使われておらず、まだエキスパートな自転車乗りさんたちの楽しみだった。

私は何しろ〝普通の人〟だったので「ホントにこの人は完走出来るの？」という思いもあったのだろう。

毎年やっている間に、リスナーさんからも「今年はいつもより速い」とか「遅いけど大丈夫？」などと反応を頂くようになり、毎年寒い冬にも関わらず同じ場所で応援してくれる人達もいた。

それから十年あまり、日本でも有数の美しさとスケールを誇る「びわ湖一周サイクリング」は、スポーツ自転車のブームと共に全国にも知れ渡るようになり、今年の三月に行われた「びわ湖一周ロングライド」というイベントでは全国から１２００人もの参加者が集まり、長浜から琵琶湖大橋廻りのビワイチを楽しんだ。

県内では昔から、高校生ぐらいになると友達同士でびわ湖一周にチャレンジするようなことも多く、私も高校生の時に一泊か二泊でキャンプしながら廻った。あるいは親子でチョットした冒険旅行として楽しんでいる光景も良く見かける。

私は今でも仲間に入れていただいて、ビワイチを時々楽しんでいるが、これからも一人でも多くの全国のサイクリスト達に「びわ湖一周サイクリング」を楽しんで欲しいと思っている。

そのためにも、湖岸ではまだまだ、歩車分離（歩行者と自転車）や車車分離（自動車と自転車）などの課題も多くかかえているので、美しく安全に楽しめるサイクルロードを完成させていく必要があると感じる。

ところで、皆さんは「輪の国びわ湖推進協議会」をご存知だろうか？

豊かな湖の回りをぐるっと廻れるびわ湖はまさに輪の国。そこで、自転車生活の素晴らしさに気づき、滋賀が「輪の国」になることを目指して活動している。

〝びわ湖は自転車でなければもったいない！〟を合言葉にびわ湖一周認定証の発行やガイドマップ作りを通じてビワイチを応援するとともに、自転車で移動し、暮らせる地域イメージの定着を目標としている。

ビワイチとまではいかなくても、湖岸を自転車で走りたくなったら、是非 http://www.biwako1.jp/ をチェックしてほしい。

※ビワイチ
びわ湖一周サイクリングのこと

※輪の国びわ湖推進協議会
びわ湖一周サイクリングを契機とし、自転車生活を取り入れる人が増えることで、滋賀がヘルシー&エコロジーな「輪の国」になることをめざしている協議会

豊田一美

●とよだ かずみ＝1947年三重県生まれ。中学、高校を大津で過ごし立教大学卒業後、アナウンサーとしてFM大阪開局と同時に入社。1997年FM滋賀の開局に携わるために、大津に戻る。現在はインターネットテレビの「ええラジオ」を主宰。レストラン大津グリル取締役。

愛する風景

お山の大将さん

畑　裕子

イラスト：徳永 拓美

親と呼ぶ人は実家の母一人となった。骨粗鬆症による骨折などで入退院を繰り返してきたが、幸いこのところ小康状態を保っている。週数回のデイサービスと自宅での暮らしを数年間続け、今もお世話になっている。献身的な職員の方々には頭が下がる思いだ。その老母がしだいに足許が覚つかなくなり、今年の一月から息子や娘たちも介護の一端を担うことにした。娘の筆頭である私も月一度、一週間ほど老母と過ごすことになった。

病院から退院してきた直後は言葉を忘れたかのように指で指図することが多かった母だった。そのたびに「おばあちゃん、口で言ってください」と皆で言うようにした。「明日、帰るからね、でもまたきます」と私が言うと、「死ぬ」と言って困らせたものだが、それから半年が経ち、ずいぶん変わってきた。「畑さん（私の夫）が寂しがっとんなろうで」とか「畑さんは自分でご飯を炊いとんなるの」などと周囲の人への配慮ができるようになってきた。と同時に、以前のやんちゃなお山の大将さんぶりが復活してきたのである。

早朝、二階で眠る私の耳に木魚の音とお経を唱える声が聞こえてくる。お経は忘れたのか途中、ムニャムニャに変わる。ポクポクの音に混じって「おばあちゃん、痛いがな」と弟の声が聞こえてくる。老母はポクポク、ポン、ポクポク、ポンと繰り返す。ポクポクと木魚を叩き、ポンと弟の頭を叩くのだ。早く起きよ、と催促するのである。

老母の転倒を気遣い、近くで眠るようになっていた弟はたまらないが、大将さんにはかなわない。「もう痛いなあ」

と言いながら、それでも眠くて布団にしがみついている。「おばあちゃんは、大将だなあ」そんなやりとりが寝ぼけ眼の私の耳にしっかり聞こえてくる。

そのうち弟は起き出し、仏さんにお茶を供える。お茶湯をするよう命じるのは老母である。そうしてようやく母の朝の日課は終わり朝食となる。いつのころからかパン食となり、よろよろしながら自分で牛乳をレンジで温める。私たち子どもははらはらしてその足取りを見つめるが、「えい、ままよ、転けたらこけたの時」と腹を据える。

「おばあちゃん、復活」

弟は苦笑しながら言う。

身体が回復してくると親としての眼も復活してくるらしい。私と妹が老母の思うように事を運ばないと

「あんたたちはのろのろしている」

と叱声が飛ぶ。手を合わせ、感謝の気持ちを表す一方、厳しい母の眼は健在なのである。

「復活も良し悪しやね」

子どもらは大声で笑い飛ばす。一人で看ているとこうもいかないだろうが、みんなで介護を分担していると心に余裕が生まれてくるのだろうか。

老母はベッドのそばに簡易トイレを置いて用を足している。

「鼻がひんまがりそうになるから息を止めて汚物を捨ててるの」

妹の言葉に私も大きな声で相槌を打つ。三十年後の我が姿と思いながらも現実感はない。

先年、次女を亡くした老母だが、同居する弟、近くに住む三女、遠くに住む私、さらに遠方に住む兄、我が子がそろった時の母の顔はこの上なく幸せそうである。

母の最晩年にわずかながらも寄り添うことができるのは私にとっても幸福なことかもしれない。眠る母の顔を眺めていると幼いころからの記憶が甦ってくる。絶対母のようにはなりたくないと思った中学、高校生の日々。雪深い故郷の風土に加えて母の感情の起伏の激しさも私が文章を書く肥やしとなったのかもしれない。

「おばあちゃん、百歳まで生きてね」

「でもそうすると、私は六十七」

妹はとほほと言った調子だ。

「私は七十を超えているわ」

子らは悲鳴を上げるが、耳の遠い九十二歳の母は知らぬ存ぜぬで大将さんの顔つきで我が子を眺めている。

畑裕子

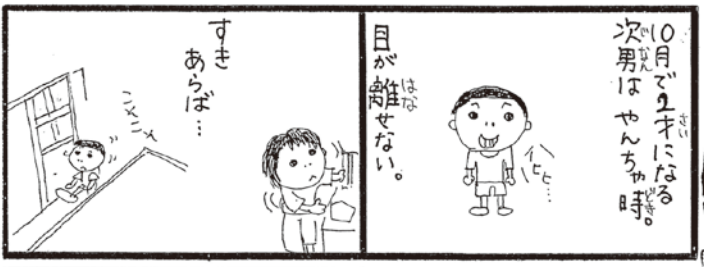
●はた ゆうこ＝1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年第5回朝日新人文学賞受賞、1994年第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

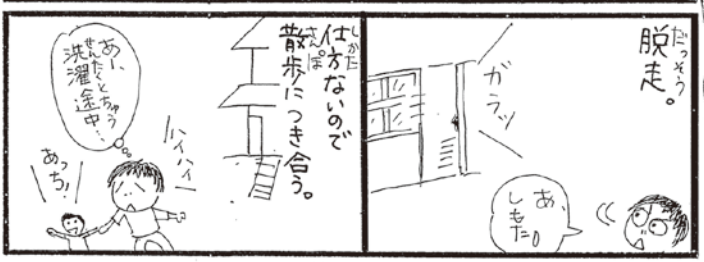
徳永拓美

●とくなが ひろみ＝1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」（京都新聞社）、「守山の野鳥ガイドブック」（守山市立教育研究所）、「甲賀のむかし話し」（サンライズ出版）、「イルカをおそった黒い波」（汐文社）など。レイカデイア大学「手作り紙芝居講座」講師。

暮らし子育て日記

作：オミユキ





私が高島市朽木に住み始めたのは1997年。2000年に木地山区の空き家に引越し、結婚、出産。憧れだった山奥暮らしも13年目になった。

もともと飽き性なので、一箇所にこんなに長く住めるとは予想外。でも、長く住まないとわからないことってあるはず。事実、長く住んでいるからこそわかることも多い。ありがたいことに家族も増え、日々の生活は大変にはなったが、近所付き合いの助け合いがより一層必要だと感じるようになった。すぐにそこにいる人が助けてくれる日本って、ムラっていいところだなぁ。今日も近所のおばあさんに「今のヨメさんたちはヒドイ（＝すごい）なあ。小さな子の世話をしながら仕事したり炊事したり…。」と感心されてしまった。いぇいぇ、昔の方が大変だったはず。と思うけど、「大変やな」って言ってもらえるだけで、ガンバロウ！って気になれる。そんな見守りをしてくれる地域なのだ。

でも、時々異国に住んでみたいと思うこともあるのだ。

●本名加藤みゆき。人口17人の集落に住み3人の子育てに奮闘中。将来、家族で海外へ旅行するのが夢。

萩遊び

三山　元暎

さし絵：中川 善雄

九月は秋風と戯れる萩が月にかかる季節である。草かんむりに秋の字は、萩が秋の花の代表であることを示している。

「萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花」この山上憶良の歌にあるように、萩は木にもかかわらず、古来草の感覚で扱われ、「秋の七種（ななくさ）」の筆頭にあげられている。

お盆が過ぎ、まだ残暑が感じられる野山に出かけると、万葉の時代から千三百年の時空を超えた今日でも、あちこちに咲き誇るさまざまな萩の仲間に出会うことができる。山萩、筑紫萩、宮城野萩、そして白萩の清楚さ、紅萩の饒舌さ、それぞれに趣がある。とくに萩は、風がないときでも、どこで風を抱きしめるのか、風とむつみあいかすかに揺れていて独特の風情がある。

日本国語大辞典に「萩遊び」という言葉が載っている。萩の花を観賞して遊ぶことで、昔は「萩の宴」もよく行われたという。

うゐおきて盛りになれり
いざ子ども庭にし出でてはき
（萩）あそびせん　（源仲遠）

「いざ子ども」さあ、みんな！という呼びかけは、秋というと、なぜか寂しさや悲しさを切々と詠いあげる古歌が多いなか、明るい秋の喜びが感じられていい。

湖北で一番の萩遊びスポットは、なんといっても萩寺として知られる長浜市の神照寺だ。ここの萩は樹齢を重ねた古木が多い。広い境内に宮城野萩など十数種の萩が咲き、見頃の九月中旬には寺宝も公開される。背丈を越すまでに成長した萩が咲き乱れ、風とじゃれあいながら波のように揺れるさまは、訪れる人をみな詩人にさせてくれる。

歳時記にみる古里の萩遊びどころを拾ってみると、次の句に出会った。

山寺の風の気ままに萩乱る
（北村成子）長浜市上野　孤蓬庵

湖も北は裏道めきぬ萩の花
（大串　章）長浜市西浅井町菅浦

三山 元暎

●みやま もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺前住職。

●なかがわ よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

♪第6回 MOHせんりゅうコンテスト 2012♪

第6回M･O･Hせんりゅうコンテストの候補作が決定しました。10月24日(水)～ 26日(金)に長浜ドームで開催される「びわ湖環境ビジネスメッセ」の弊社ブースで、皆様によるベスト3を投票していただきます。投票してくださった方には、パインあめさんからステキな何かが…。ふるってご来場ください。みなさまご協力ありがとうございます。アートギャラリーもお楽しみに。

♪コンテスト候補作♪

- さむいよる　エアコンつけずに　ゆたんぽで
- 米ひとつ　残さず食べよう　大切に
- 両親の　おかげで私は　生きている
- MOH通信　ひとりで読むには　もったいない
- これからは　世界共通　もったいない
- 買うまえに　考えることが　まず一歩
- おかげさま　その一言で　みな笑顔
- もったいない　気持ち思えば　行動に
- 人と人　つなぐ言葉は　ありがとう
- 生きている　すべての命の　おかげさま

社内投票の集計風景

本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

津波をこえたひまわりさん

小さな連絡船で大島を救った菅原進

●著者／今関信子
●発行／佼成出版社
●価格／1500円＋税
●内容／このままでは、島が孤立する！東日本大震災によって、大きな被害を受けた宮城県の大島。震災後の孤立から大島を救ったのは、小さな連絡船「ひまわり」だった！。感動ノンフィクション。

地方公務員 仕事の副読本

●著者／連藤寿
●制作／京都新聞出版センター
●価格／1500円
●内容／元県職員の連氏が30余年務めた自身の経験を振り返り、「住民と向かい合って仕事をする『向務員』になってほしい。」などのメッセージをつづった。

「びわ湖検定」でよみがえる滋賀県っておもしろい

●著者／児玉征志
●発行／新評論
●価格／2000円＋税
●内容／単身赴任で滋賀の地へ。ネガティブだった著者をポジティブにしたのは「びわ湖検定」だった!?

からすうりの熟れる頃

●編者／下村京子（大津あいあい保育園長）
●発行／大津あいあい保育園
●内容／下村氏の45年にわたる保育実践の集大成！子どもたちの笑顔あふれる写真も印象的。

琵琶湖の船が結ぶ絆

●企画・編集／滋賀県立安土城考古博物館、長浜市長浜城歴史博物館
●制作／サンライズ出版
●発行／滋賀県立安土城考古博物館
●内容／古代から琵琶湖は巨大な水路であった。「淡海」と呼ばれた琵琶湖の水路（絆）と多彩な船の歴史を紐解く。

「大阪くらしの今昔館」ものがたり

●発行／住まいのミュージアム大阪くらしの今昔館
●内容／「住まいの歴史と文化」をテーマにした、日本で初めての専門ミュージアムの、これまでの歩みを紹介。

昭和十年代の時空

●著者／柴田修、伴年晶、安原秀
●発行／OLA出版部
●価格／1714円＋税
●内容／レイテ湾に沈んだ弟、今まだ健在の兄。二人が写し撮った、人々と空間がなじみ合う風景。そこには昭和初期の地域社会の厚みがある。

理念と経営3月号

●著編集／背戸逸夫
●発行／コスモ教育出版
●価格／1000円＋税
●内容／中小企業を活性化し、成功を探求する経営誌。巻頭対談は（株）日本レーザー代表取締役社長・近藤宣之氏ｖｓ法政大学大学院政策創造研究科教授・坂本光司氏。テーマは「あなたの経営は、社員の心に響いていますか」。中小企業が永続するためのヒントとは―。

印刷EXPO vol.2「きもだめし」公式ガイドブック

●発行／印刷EXPO実行委員会
●撮影／辻村耕司
●内容／印刷EXPO vol.2「きもだめし」の公式ガイドブック。印刷技術の紹介や制作裏話満載。

日帰りウォーキング関西

●編集／高橋久恵
●発行／JTBパブリッシング
●価格／1400円＋税
●内容／四季の花々に出合える道、里山の自然あふれる道、歴史を感じる街道・古道。特選50コースを紹介。

血引きの岩

●著者／星野之宣
●発行／朝日新聞社
●価格／900円＋税
●内容／琵琶湖と淡路島には深いつながりが!?伝奇ミステリーの第一人者、星野之宣の「幻の未完シリーズ」4編と、他2編を収録。

偉大なる、しゅららぼん

●著者／万城目学
●発行／集英社
●価格／1619円＋税
●内容／琵琶湖畔の街・石走に代々住み続ける日出家と棗家。両家には受け継がれてきた特別な「力」があった。滋賀を舞台に、力で力を洗う戦いが始まる―!

＊こんなん見つけた＊

ヒラペリラ

比良の赤しそジュース。比良の里山で育てられた赤しそが、添加物不使用の赤しそジュースに変身しました。その名も「ヒラペリラ」！そのまま冷水で薄めて飲むほか、ソーダ割りやフローズンなどアレンジができて楽しい！ 6次産業化に係る優良取組表彰事業「近畿農政局長賞」受賞！

●ご注文・お問い合わせ
一般社団法人 比良里山クラブ
〒520-0063　滋賀県大津市横木2-25-12
TEL&FAX:077-527-2833
Email:info@hira-satoyama.net
http://hira-satoyama.net

「びわこみみの里」で見つけた！ホワイトボード

持ち歩きに便利なサイズのホワイトボード。消しゴムのかわいいマスコットは手作りでとってもキュート！

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。6月～7月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

「理念と経営」講演

●日時：6月25日
●主催：日本創造教育研究所グループ
●対象：中小企業経営者
●演題：中小企業にしかできない持続可能社会の企業経営～共生経済社会への意識改革～
●講師：森建司
●会場：ヒルトン名古屋
●参加人数：120人
●内容：日本創造教育研究所の田舞徳太郎氏が主宰する全国の中小企業経営者の勉強会。講演終了後の田舞氏と講師によるフロアトークで共生経済社会に向けての課題が明らかにされた。

執筆者懇談会28

●日時：6月26日
●主催：弊誌
●参加人数：13名
●内容：37号、38号の特集を決定。取材地や取り上げる方向性を検討。比叡山延暦寺千手院住職の小林隆彰師らにも参加していただき、釈迦の教えなどの話で盛り上がった。

FM滋賀「びわ湖リーダーズ」

●日時：6月29日
●パーソナリティ：川本勇
●ゲスト：森建司
●内容：滋賀県と紙の関係や創業当時の裏話、「循環型社会システム研究所」をつくったきっかけなどを、勇さんとの軽快なトークとともにお届け。森代表から滋賀の若者に向けてのメッセージは「心の壁の囚人で一生おわるな！」心の壁を打ち破り、一歩踏み出す勇気を持とう。

県立大「市民参加論」講演

●日時：7月13日
●対象：履修学生
●場所：滋賀県立大学
●参加人数：39名
●内容：前半は森代表が「持続可能社会の扉をひらく市民参加」をテーマに講演。後半は辻村編集長がこれまでのM・O・H活動について紹介。授業レポートには「一人ひとりのライフスタイルや考え方を変えていかねば」という意見も多く、その理解力の深さにMOH（もう）感激！

M・O・Hニュース

第１回未来戦略サロン開催！ 今年のテーマは「豊かな生活」

7月31日、滋賀県庁北新館３階中会議室で第１回未来戦略サロン開催が開催された。「豊かな生活ってなに?」「未来のために、今わたしたちがすべきことは?」滋賀のこと、未来のことに関心を持った、学生、主婦、サラリーマン、僧侶…様々な人々が集まった。

第１回のキーワードは「わたし」。自分自身が考える豊さについて話し合い、自分の家のこと、取り組んでいることなどお互いに刺激を受け合った。

サロンはとても和やかな雰囲気で進められ、「こんないい会話の場があることを知った事が今日の収穫」という声も。

本サロンは、誰でも気軽に参加できる場づくりを目指している。次回以降も参加者募集中だ。

●次回以降開催予定
第2回 8月30日(木)18:00～
第3回 10月7日(日) 遠足・高島結びめ、ソラノネ
第4回 10月31日(水)18:00～

イベント紹介

山のめぐみフォーラム2012 in くつきの森「里山と水」

山のめぐみ（水をテーマに）を改めて見直し再発見し、これからの森づくりや地域づくりに役立てることを目的にフォーラムを開催します。併せて、田舎の伝統的な料理を味わう夕食会と音楽会による交流会を開催し、秋のくつきの森（朽木地域）の素晴らしさを共有・体験する機会とします。

- 日時:年9月22日（土）13:30開場
- 場所:森林公園くつきの森「やまね館」（高島市朽木麻生）
- 内容:　・第1部フォーラム　14:00～（入場無料）
  ・第2部夕食会&音楽会17:30～（入場料2,000円／人）
- 問合せ、申込先: 森林公園くつきの森
  Tel.0740-38-8099 FAX:0740-38-8012
  mail:asosatoyama@zb.ztv.ne.jp
  〒520-1451 滋賀県高島市朽木麻生443
- 主催:NPO法人麻生里山センター
- 後援:M・O・H通信、太陽生命保険㈱、公益財団法人森林文化協会

びわ湖環境ビジネスメッセ2012　同時開催セミナー スマートコミュニティ～その実例と地域企業の仕事づくりを考える～

本セミナーではスマートコミュニティの形成によって、地域企業の新たな事業化の可能性を事例をふまえ探ります。

- 日時:10月26日（金）10:30～12:30
- 場所:滋賀県立長浜ドームセミナー室3
- 定員:80名（お申し込み順）
- 参加無料
- 講演者: 竹中篤、柴田正明、森建司
- 問合せ: NPO-EEネット　担当　廣瀬
  Tel:077-561-5333（滋賀県中小企業家同友会）
  mail:hirose@shiga.doyu.jp
  〒540-0011　大阪市中央区農人橋2丁目1番30号八木ビル4階
- 参加申し込み
  びわ湖環境ビジネスメッセホームページよりお願いします
  http://www.biwako-messe.com/seminar/portal/event_view/76

よばれやんせ湖北「ビワマス」と「ジビエ」そして「郷土料理」

「よばれやんせ湖北」とは、滋賀県湖北地方に伝わる伝統料理、また新たに開発されている特産品、丹精込めて作られた食材等を地域内外から集まったお客様（消費者）に、生産者の思いやこだわりを聞きながら食してもらうことによって、ファンづくりと、口コミなどでの情報発信へとつなげ、地産地消の促進をめざす会です。

- 日時:11月18日（日）10:30～15:30頃（受付10:00～）
- 場所:朝日漁業会館（長浜市湖北町尾上144-14）
- 内容:今年のテーマは「ビワマス」と「ジビエ」そして「郷土料理」。湖北の魅力を感じていただける産品に出会っていただく場にぜひお越しください。
- 定員:80名・参加費:2,000円
- 問合せ、申込先:実行委員会事務局
  NPO法人木野環境（担当:北井）
  Tel:075-708-8061 FAX:075-708-8062
  mail:oubo@kino-eco.or.jp
  〒600-8085 京都市下京区葛籠屋町515-1
- 主催:よばれやんせ湖北実行委員会・長浜バイオクラスターネットワーク
- 協力:滋賀グリーン購入ネットワーク

赤野井食と文化の歴史探訪 守山新観光スポットぶらり散策!

「地域食材を使った食文化交流」と「赤野井諏訪家屋敷小菊展」

- 日時:11月3日（土祝）10:00～14:30（小菊展のみ11月3日～5日）
- 場所:赤野井諏訪家屋敷周辺
- 内容:・諏訪家前庭園にて小菊展覧会
  ・商工会議所ブースに赤野井地域商店街を中心とした商品即売
  ・地域食材を使用した加工品展示
- 問合せ: 守山市駅前総合案内所
  Tel.077-514-3765
- 主催:守山商工会議所
- 協力:守山市観光物産協会
- 後援:守山市、守山市教育委員会

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する心とか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために
「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」を発行する。

《 M·O·H通信概要 》

■目的

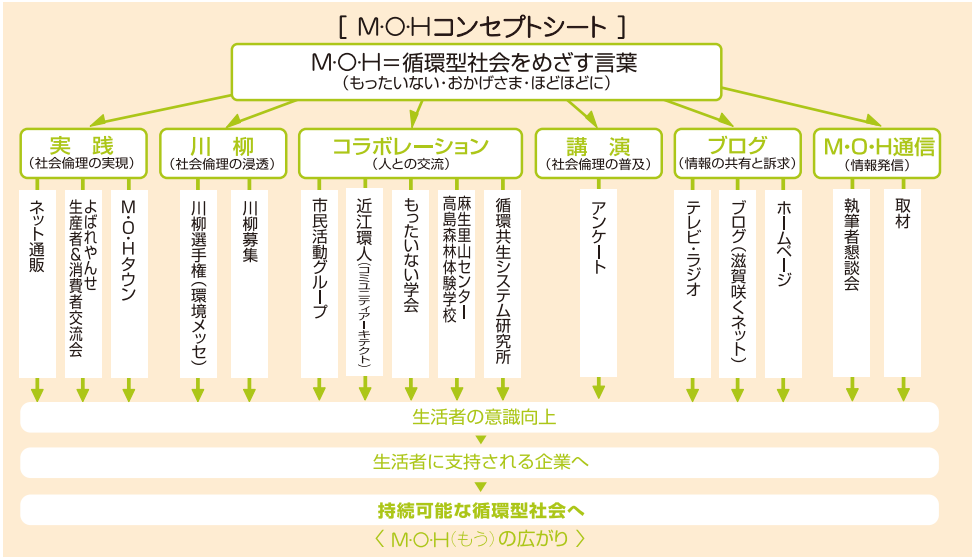
(1) 循環型社会構築に向けた意識改革
(2) 浪費型社会通念の脱却
(3) 人生哲学を学ぶ

■事業

(1) 通信の発行及び出版
(2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111
滋賀県長浜市
川道町759−3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp
代表:森 建司
担当:つじむら ことみ



読者の声

★お世話様になっております。麻生義継様の数々の自然エネルギー関係のお仕事なさってこられた事に、大変感動致しました。私自身、1年前の同郷市民として全く同感です。
古河市　菅野ハルヨ

★M・O・H通信36号をお送りくださりありがとうございました。御地でもそうでございますが、地域が少しずつ活気づきつつあるのを感じます。自然界は常に循環。我々の社会も循環を頭に入れて…ということをいつも冊子を拝見しながら思います。
佐倉市　平田和子

★この度は、M・O・H通信36号を送付いただきまして、ありがとうございます。今号も興味深い記事が多く掲載されており、楽しく読ませていただきました。
大津市　島戸克浩

★36号の金森様と海老様のお話を読み、これからの中小企業の経営に絶対必要な取り組みが沢山盛り込まれていることに驚きました。そして何より驚いたのが、私の恩師である彦根東の元野球部監督今井先生の名前です。実は、今井監督は堅田高校で1度甲子園出場に導いた方でして、堅田高校での最後の教え子が私の学年であります。非常に厳しい先生で、今でも先生に教えて頂いたことは社会人になっても支えになっております。本当にびっくりして、懐かしい思い出を振り返りながら新幹線で読んでおりました。金森様のマーケティングとイノベーションで経営革新されている姿は素晴らしいなぁと感銘を受けました。
大津市　鈴木健司

お知らせ

しが棚田ボランティア参加者募集！

しが棚田ボランティアは、過疎・高齢化が進行する棚田地域において、地域住民だけでは実施が困難となっている田んぼの草刈り、獣害防止柵の設置などの作業を手伝うことで、棚田の保全に役立つことができるボランティアです。

●お問い合せ先
しが棚田ボランティア事務局
滋賀県農政水産部農村振興課（担当：中尾、田井中）
〒520-8577　大津市京町四丁目1番1号
TEL：077-528-3961
FAX：077-528-4888
Email：gh01@pref.shiga.lg.jp

《次号予定》

2012年12月発行予定

■特集:「教育」生きる力
●MOHな人／「比叡山延暦寺」長臈・小林隆彰
●対談／「環境教育を体操服で」今関信子＋岡部達平＋森健司
●取材／「読み聞かせ」絵本の会・平松明美
●寄稿／「道徳教育」昭和女子大学教授・押谷由夫
●取材／「くつきの山で教わる子供たち」太陽生命の取り組み
●寄稿／「生活科教育」滋賀県小学校教育研究会・西嶋頼基
●取材／「書店で糀漬け」木之本いわね書店
●取材／「わたしたちが創る」よばれやんせ湖北
●連載／通常通り
※ 敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

最近、なんだか、身の回りがさわがしい。弊誌発刊9年を数えると、たわごとが現実になるという事実に遭遇する。世の中変わっているんだ、と実感する。滋賀県民も黙っちゃいない。活動家が発言力を持ってきた。鷲田先生の言葉で「団塊の世代がいないこと、よそ者がいること、女性がいること」物事がうまくいく秘訣だそうだ。（こと）

私たちの未来がどうなるかなんてわからない。でも、未来に関心を持って「政治を変えよう」「滋賀を変えよう」ってまっすぐ進む人たちに、M・O・H活動を通して出会うことができた。彼らはとても輝いて見える。未来に関心を持とう。そこからは、自分次第。（ひとみ）

《M·O·H通信》受付中！

あなたも「**M・O・H**通信」を読んでみませんか。特典として、**M・O・H**通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》申込書　FAX 0749-72-8681

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住　所	〒		
電　話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.37（通巻38号）2012年9月20日発行　発行部数6,500部

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H通信編集局
代　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
編　集　上岡 瞳
校正協力　稲垣 重雄
取　材　山崎 彩
デザイン　伊達デザイン室
写　真　辻村写真事務所
印　刷　プランセル
ホームページ　プランセル
ブ ロ グ　滋賀・咲くブログ

●創刊/2003年3月度

●執筆者懇談会
内藤 正明　畑 裕子
海東 英和　堤 幸一
山田 朝夫　進 ひろこ
下西 康嗣　中村 誠
末永 國紀　笹山 千怜
花田 眞理子　結城 美枝子
弘中 史子　松崎 和弘
今関 信子　井上 昌幸
山崎 隆　辻村 耕司
三山 元映　佐々木 洋一
加藤 みゆき　徳永 拓美
清水 安治　山口 美知子
檀上 俊雄　岡部 達平
森 孝之　豊田 一美
（順不同・敬称略）

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
循環共生社会S研究所
高島森林体験学校
麻生里山センター
NPO法人環人ネット
近江環人 地域再生学座
もったいない学会
野洲生活学校
EEネット
中小企業家同友会
（順不同）

●支援
新江州（株）
〒5260111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277　FAX.0749-72-8681
★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://www.mohmoh.jp/
MOH図書館　検索

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。